

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第175集

鴻巣市

新屋敷遺跡C区

鴻巣新屋敷団地造成事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告
<第1分冊>

1996

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



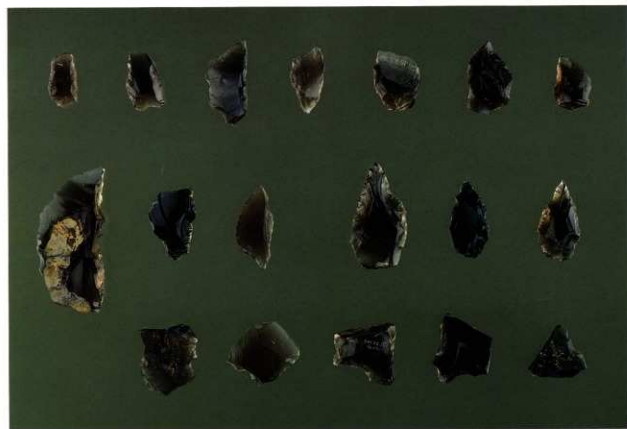
新屋敷遺跡全景（上から）



新屋敷遺跡全景（東から）



先土器時代の石器群(1)



先土器時代の石器群(2)



古墳時代前期の高坏



古墳時代前期の壺



古墳群の近景（中央左から第40号墳・第35号墳）



第35号墳埴輪出土状態



第35号墳出土人物埴輪



第35号墳遺物出土状態



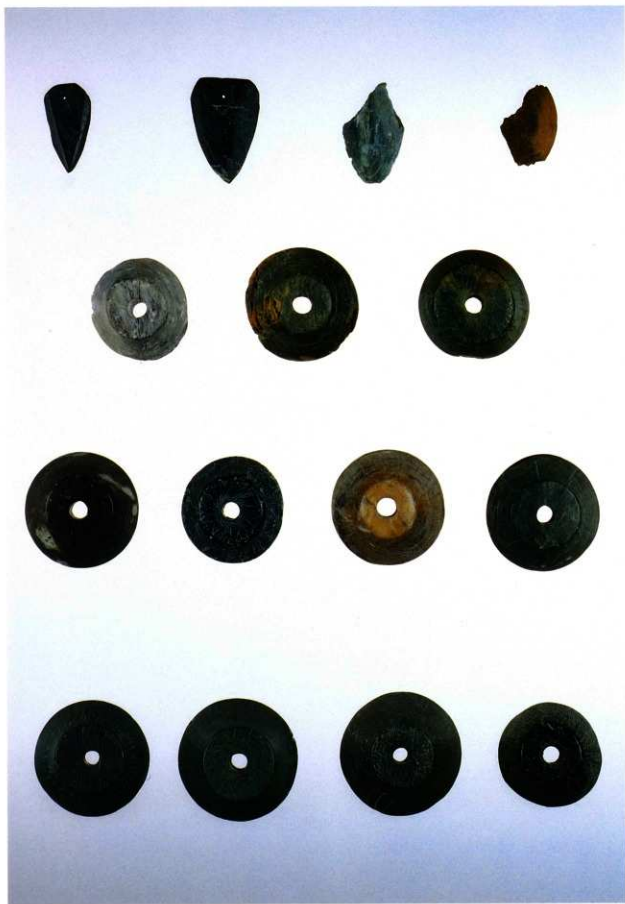
第35号墳出土の供献土器



第22号墳出土人物埴輪



第1号墳輪棺



剝形石製品・紡錘車

序

ひな人形と花の町として知られている鴻巣市は、中山道の宿場町として栄えてきましたが、周囲には田園地帯がひろがり、自然環境に恵まれた街でもあります。

近年の都市化により住宅地域化が進んでいますが、自然と調和をとりつつ、開発整備が行われているところであります。

埼玉県住宅供給公社では、県内における住宅環境の整備を図る一環として鴻巣新屋敷団地造成事業を進めておりますが、地域活性化の一翼を担うものとして期待されております。

今回の鴻巣新屋敷団地造成予定地内には古墳跡を始めとし、埋蔵文化財の包蔵が知られておりましたが、その取り扱いについては関係機関と慎重に協議を重ねられてまいりました。その結果、記録保存の措置を講ずることになり、埼玉埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施することになりました。

鴻巣市は生田塚遺跡の埴輪窯跡で知られるように、歴史が古く、埼玉県の県名発祥地である埼玉古墳群に隣接する地域でもあります。また、江戸時代には天領として知られ、国立歴史民俗博物館所蔵の「江戸凶屏風」に鴻巣御殿が描かれていることも周知の通りであります。

今回の調査の対象である新屋敷遺跡は、生田塚埴輪窯跡の隣接地であるとともに、生田塚古墳群に続く地域でもあり、以前に行われた2回の調査でも多数の古墳が発見されております。

今回の調査では、旧石器時代の生活跡や豊富な石器類をはじめとして、量は少ないが縄文時代各時期の土器群が発見され、さらに古い時代の様相も明らかになってまいりました。

古墳時代では古墳群が造られる以前に、集落が存在していたことが明らかになり、その後、この地に集落

を営むのは平安時代になってからであることもわかってまいりました。

古墳跡は今回の調査と合わせて、今までに54基が発見されており、なかには埼玉古墳群との関連を思わせる遺物を出土した古墳もあります。埴輪のなかには表情豊かな人物埴輪もあり、今後の研究の進展によって、生田塚埴輪窯跡や埼玉古墳群との関係が明らかになっていくものと期待されます。

また、江戸時代の建物跡が多数発見されており、その出土遺物からは庶民ではなく武士の生活が窺ってまいります。この地が、新屋敷と名付けられているところからも、鴻巣御殿との関連が思われるところあります。

発掘調査の成果を公開する遺跡説明会では、千人以上もの住民の方々においていただき、関心の高さも知られるところとなりました。

これらの成果をまとめたものが本書であります。本書が埋蔵文化財保護の基礎資料として、また、学術研究や教育・普及の資料として広く活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、発掘調査から報告書刊行に至るまで御指導、御協力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、埼玉県住宅供給公社、鴻巣市教育委員会、並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成8年3月

財団法人 埼玉埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例言

1 本書は埼玉県鴻巣市に所在する、新屋敷遺跡C区に関する発掘調査報告書である。遺跡の代表番地と、発掘調査に対する文化庁指示通知は以下の通りである。

新屋敷遺跡C区(略号SNYSK)

鴻巣市東4丁目384番地1他

平成5年6月29日付け委保第5の641号

鴻巣市東4丁目384番地2他

平成6年4月27日付け文教第2の20号

2 発掘調査は埼玉県住宅供給公社による鴻巣新屋敷団地の造成に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整を経て、埼玉県住宅供給公社の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

3 発掘調査は平成5年4月1日～平成6年7月31日まで行い、平成5年度が2000㎡、平成6年度が5670㎡、合計25670㎡について実施した。

4 発掘調査の担当者は以下の通りである。

平成5年度

昼間孝志、金子直行、大谷徹、西山真理子

平成6年度

昼間孝志、田中正夫、熊沢孝之

5 報告書作成事業は平成6～7年度に受託し、平成6年4月1日～12月31日、平成7年4月1日～5月31日までを大谷徹が、平成7年6月1日～平成8年3月31日までを金子直行が担当し、実施した。

なお、発掘調査と整理作業の組織は3頁に示した通りである。

6 出土品の整理及び実測、作図、作表、写真撮影は金子と大谷が主に行い、先土器時代の遺物については西井幸雄、古墳時代前期の土器については書上元博が行った。

7 遺跡の基準点測量と航空写真はシン航空写真株式会社、巻頭カラー写真の一部は小川忠博に、人骨の鑑定は聖マリアンス医科大学に、火山灰とローム分析は古環境研究所に、出土遺物の胎土分析は第四紀地質研究所にそれぞれ委託した。

8 本書の執筆は金子、大谷が主に行い、文責は次の通りである。

I-1 埼玉県生涯学習部文化財保護課

I-2.3、III、V 金子

II、VII、VIII、IX、X-3.4 大谷

IV、X-1 西井

VI、X-2 書上

9 本書の編集は、当事業団資料部長、同副部長の監修のもとに、資料部資料整理第一課の金子が行った。

10 本書に掲載した資料は、平成8年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管している。

11 本書を作成するにあたり、下記の方々よりご教示、御協力を賜った。(敬称略、五十音順)

新井 端 江原昌俊 大田博之 岡田賢治

岡田茂弘 小倉 均 車崎正彦 坂口 一

坂本和俊 桜井 伸 桜井元子 寺社下 博

杉山晋作 鈴木裕子 新宅輝久 高橋克壽

高橋繁司 塚田良道 鳥羽政之 中島令子

日高 慎 平田重之 堀口萬吉 松崎慶喜

右島和夫 山崎 武 渡辺 一

鴻巣市教育委員会 埴輪研究会

凡例

1 本書の遺跡全体図におけるX・Yの座標数値は、国土標準平面直角座標第IX系に基づく座標値を示している。また、各遺構図における方位指示は、全て座標北を示している。

2 本遺跡におけるグリッドの呼称は、南西杭が基準となり、南から北へ向かってA～Z、ア、イ、ウ…となり、西から東へ向かって1～34…となる。

また、グリッドはA区、B区、C区とも共通であり、平成6～7年度に行われたD区とも共通しており、新屋敷遺跡全体を覆う様に広範囲にグリッドを設定している。

3 グリッドは10mを大グリッドとして設定し、大グリッド内に2mの25の小グリッドを設定した。遺構の位置等の表記は、大グリッドを基準としている。また、先土器時代の調査では小グリッドを基本とし、表記も小グリッドを基準としている。

4 本書における押印内の遺構の表現は、便宜上、下記の略号で表記した。

SJ…住居跡	SB…掘立柱建物跡
SA…柵列	SD…溝
SK…土壌	SE…井戸
SS…古墳	

5 遺構番号は、原則として調査時に付した番号をそのまま使用した。住居跡、土壌、溝、井戸、古墳の遺構番号はA区、B区を含めた通し番号となっている。

ただし、SX-5→SK-94、SX6→SK-76、SX7→SK-82のみ変更した。

6 遺構図及び実測図の縮尺は、原則として以下の通りである。

遺構図

先土器時代遺物分布図…1/40

住居跡…1/60

掘立柱建物跡・土壌・井戸…1/80

柵列・ピット群…1/200

土壌墓・遺物微細図…1/30

埴輪棺…1/20

古墳…1/160

遺物

先土器時代石器…2/3

縄文時代の土器・石器…1/3

土師器・須恵器・陶磁器…1/4

円筒埴輪・形象埴輪…1/5

鉄製品・土製品…1/3

その他のものに関しては、スケール及び縮尺率等をその都度表記して示している。

7 遺構断面図における水平数値は海拔高度を示しており、単位はmである。

8 住居跡の遺構図における網掛け部分は焼土の範囲をあらわしており、●印のドットは遺物を、○印のドットは紡錘車を示している。

9 古墳時代の土師器実測図における網掛け部分は赤色塗彩が行われている範囲を表している。

10 古墳時代・平安時代の須恵器は、断面を黒く塗りつぶしてある。

11 遺物観察表の記載は次の通りである。

法量の()付き数値は推定値を表し、単位はcmである。

胎土は肉眼で観察される範囲の混入物を記載した。

A…石英、B…白色粒子、C…白色針状物質、D…長石、E…角閃石、F…赤色粒子、G…黒色粒子、H…雲母、I…片岩、J…砂粒である。

焼成はA良好、B普通、C不良の3ランクに分けた。

残存率は大まかなもので、厳密なものではない。

12 本書に掲載した地形図は、建設省国土地理院発行の1/50000の地形図を使用した。

13 本書に使用した参考・引用文献は、(著者 発行年)で表記し、巻末にその一覧表を掲載した。

目次

口絵
序
例言
凡例

<第1分冊>

I. 調査の概要	1
1. 調査に至るまでの経過	1
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の経過	3
II. 遺跡の立地と環境	4
III. 調査の概要	11
IV. 先土器時代の調査	12
1. 調査の概要	12
2. 層位	12
3. 石器集中	20
4. 出土石器	29
5. 磨石の接合	52
6. 器種別分布	55
7. 礫群	61
8. 尖頭器石器群	91
9. 縄文時代草創期の石器	91
V. 縄文時代の調査	95
1. 調査の概要	95
2. Tピット	95
3. グリッド出土遺物	97
VI. 古墳時代前期の調査	103
1. 調査の概要	103
2. 住居跡	103
VII. 古墳時代後期の調査	137
1. 調査の概要	137
2. 古墳跡	139
3. 埴輪棺	269
4. 土墳墓	272
5. グリッド出土遺物	273
VIII. 平安時代の調査	277

1. 調査の概要	277
2. 住居跡	279
3. 井戸跡	312
IX. 中・近世・その他の時代の調査	313
1. 調査の概要	313
2. 掘立柱建物跡	315
3. 櫓列跡	327
4. ビット群	337
5. 溝跡	337
6. 土墳墓	352
7. 土壕	353
8. 井戸	337
9. グリッド出土の遺物	390
X. 調査の成果と課題	391
1. 新屋敷遺跡C区の先土器時代	391
2. 古墳時代前期の土器群について	415
3. 新屋敷遺跡の古墳群について	420
4. 新屋敷遺跡における近世の様相	423

<第2分冊>

附編

先土器時代石器観察表	1
1. 新屋敷遺跡C区の自然化学分析	51
2. 新屋敷遺跡C区の火山灰分析	63
3. 新屋敷遺跡C区出土遺物の胎土分析	68
4. 新屋敷遺跡C区出土の人骨分析	86

写真図版

挿 図 目 次

第1図	埼玉県の地形図	4	第36図	掻・削器分布図	58
第2図	遺跡周辺の地形図	6	第37図	石核分布図	59
第3図	新屋敷遺跡の調査沿革図	8	第38図	敲石・磨石・その他の石器分布図	60
第4図	新屋敷遺跡C区全体図	10	第39図	磔群1	62
第5図	先土器時代調査区及び石器・磔分布図	14	第40図	磔群1微細図	63
第6図	土層断面配置図	16	第41図	磔群2	64
第7図	土層断面図(1) L=15.00m	17	第42図	磔群2微細図	65
第8図	土層断面図(2) L=15.00m	18	第43図	磔群3	66
第9図	土層断面図(3) L=15.00m	19	第44図	磔群3微細図	67
第10図	石器集中1	21	第45図	磔群4	68
第11図	石器集中2	22	第46図	磔群4微細図	69
第12図	石器集中3	23	第47図	磔群5	70
第13図	石器集中4	24	第48図	磔群5微細図	71
第14図	石器集中5	26	第49図	磔群6	72
第15図	石器集中6	28	第50図	磔群6微細図	73
第16図	石器実測図(1)	30	第51図	磔群7	74
第17図	石器実測図(2)	34	第52図	磔群7微細図	75
第18図	石器実測図(3)	38	第53図	磔群8	76
第19図	石器実測図(4)	40	第54図	磔群8微細図	77
第20図	石器実測図(5)	41	第55図	磔群9	78
第21図	石器実測図(6)	42	第56図	磔群9微細図(1)	80
第22図	石器実測図(7)	43	第57図	磔群9微細図(2)	81
第23図	石器実測図(8)	44	第58図	磔群9微細図(3)	82
第24図	石器接合図	45	第59図	磔群9・10微細図(4)	83
第25図	石器実測図(9)	45	第60図	磔群9・10微細図(5)	84
第26図	石器実測図(10)	47	第61図	磔群10	85
第27図	石器実測図(11)	48	第62図	磔接合図(1)	87
第28図	石器実測図(12)	49	第63図	磔接合図(2)	88
第29図	石器実測図(13)	50	第64図	磔接合図(3)	89
第30図	石器実測図(14)	51	第65図	磔重量ヒストグラム	90
第31図	磨石接合図(1)	52	第66図	石器実測図(15)	92
第32図	磨石接合図(2)	53	第67図	尖頭器分布図	93
第33図	磨石接合図(3)	54	第68図	石器実測図(16)	94
第34図	ナイフ形石器分布図	56	第69図	縄文時代の土壌	96
第35図	角錐状石器分布図	57	第70図	グリッド出土の縄文土器(1)	98

第71図	グリッド出土の縄文土器(2)	99	第108図	第1号墳	140
第72図	グリッド出土の縄文土器(3)	100	第109図	第1号墳遺物分布図	141
第73図	グリッド出土の石器	101	第110図	第1号墳出土遺物	142
第74図	古墳時代前期の遺構配置図	104	第111図	第2号墳と出土遺物	143
第75図	第13号住居跡	105	第112図	第4号墳	145
第76図	第13号住居遺物分布図	106	第113図	第4号墳遺物分布図(1)	146
第77図	第13号住居出土遺物	107	第114図	第4号墳遺物分布図(2)	147
第78図	第14号住居跡	108	第115図	第4号墳出土遺物(1)	148
第79図	第14号住居遺物分布図	109	第116図	第4号墳出土遺物(2)	149
第80図	第14号住居出土遺物	110	第117図	第4号墳出土遺物(3)	150
第81図	第17号住居跡	111	第118図	第4号墳出土遺物(4)	151
第82図	第18号住居跡	112	第119図	第4号墳出土遺物(5)	152
第83図	第19号住居跡	113	第120図	第4号墳出土遺物(6)	153
第84図	第19号住居出土土器	114	第121図	第4号墳出土遺物(7)	154
第85図	第27号住居跡	115	第122図	第22号墳	156
第86図	第27号住居跡掘り方	116	第123図	第22号墳遺物分布図	157
第87図	第27号住居出土土器	116	第124図	第22号墳出土遺物(1)	158
第88図	第28号住居跡と出土遺物	117	第125図	第22号墳出土遺物(2)	159
第89図	第40号住居跡	118	第126図	第22号墳出土遺物(3)	160
第90図	第41号住居跡と出土遺物	119	第127図	第22号墳出土遺物(4)	162
第91図	第41号住居跡掘り方	120	第128図	第22号墳出土遺物(5)	164
第92図	第42号住居跡と掘り方	121	第129図	第22号墳出土遺物(6)	165
第93図	第44号住居跡	123	第130図	第23号墳	166
第94図	第44号住居遺物分布図	124	第131図	第23号墳出土遺物	167
第95図	第44号住居出土遺物	125	第132図	第24号墳	168
第96図	第45号住居跡	126	第133図	第24号墳出土遺物	169
第97図	第45号住居跡掘り方	127	第134図	第25号墳	170
第98図	第45号住居出土土器	127	第135図	第25号墳遺物分布図(1)	171
第99図	第46号住居跡	128	第136図	第25号墳遺物分布図(2)	172
第100図	第46号住居出土土器	129	第137図	第25号墳出土遺物(1)	173
第101図	第47号住居跡と出土土器	130	第138図	第25号墳出土遺物(2)	174
第102図	第47号住居跡掘り方	131	第139図	第26号墳	175
第103図	第48号住居跡	132	第140図	第26号墳遺物分布図(1)	176
第104図	第48号住居出土土器	133	第141図	第26号墳遺物分布図(2)	177
第105図	第49号住居跡と出土土器	134	第142図	第26号墳出土遺物(1)	178
第106図	第50号住居跡と出土土器	135	第143図	第26号墳出土遺物(2)	179
第107図	古墳時代後期の遺構分布図	138	第144図	第26号墳出土遺物(3)	180

第145图	第26号填出土遗物4)·····	181	第182图	第39号填 ·····	222
第146图	第26号填出土遗物5)·····	182	第183图	第39号填出土遗物·····	223
第147图	第27号填 ·····	183	第184图	第40号填 ·····	225
第148图	第28号填出土遗物·····	183	第185图	第40号填遗物分布图(1)·····	226
第149图	第28号填 ·····	184	第186图	第40号填遗物分布图(2)·····	228
第150图	第29号填 ·····	185	第187图	第40号填出土遗物(1)·····	229
第151图	第29号填遗物分布图(1)·····	186	第188图	第40号填出土遗物(2)·····	230
第152图	第29号填遗物分布图(2)·····	187	第189图	第40号填出土遗物(3)·····	231
第153图	第29号填遗物分布图(3)·····	188	第190图	第40号填出土遗物(4)·····	232
第154图	第29号填出土遗物(1)·····	189	第191图	第40号填出土遗物(5)·····	233
第155图	第29号填出土遗物(2)·····	190	第192图	第41号填 ·····	234
第156图	第30号填 ·····	191	第193图	第42号填 ·····	234
第157图	第31号填 ·····	192	第194图	第43号填 ·····	235
第158图	第32号填 ·····	193	第195图	第43号填出土遗物(1)·····	236
第159图	第32号填遗物分布图·····	194	第196图	第43号填出土遗物(2)·····	238
第160图	第32号填出土遗物·····	195	第197图	第44号填 ·····	240
第161图	第33号填 ·····	196	第198图	第44号填遗物分布图·····	241
第162图	第33号填出土遗物·····	197	第199图	第44号填出土遗物·····	242
第163图	第34号填与出土遗物·····	198	第200图	第45号填与遗物分布图·····	243
第164图	第35号填 ·····	199	第201图	第45号填出土遗物·····	244
第165图	第35号填遗物分布图(1)·····	200	第202图	第46号填与遗物分布图·····	245
第166图	第35号填遗物分布图(2)·····	202	第203图	第46号填出土遗物·····	246
第167图	第35号填遗物分布图(3)·····	204	第204图	第47号填 ·····	247
第168图	第35号填遗物分布图(4)·····	205	第205图	第47号填出土遗物·····	248
第169图	第35号填出土遗物(1)·····	206	第206图	第48号填 ·····	249
第170图	第35号填出土遗物(2)·····	207	第207图	第48号填出土遗物·····	250
第171图	第35号填出土遗物(3)·····	209	第208图	第49号填 ·····	251
第172图	第35号填出土遗物(4)·····	210	第209图	第49号填出土遗物·····	252
第173图	第35号填出土遗物(5)·····	211	第210图	第50号填 ·····	253
第174图	第35号填出土遗物(6)·····	212	第211图	第50号填遗物分布图与出土遗物·····	254
第175图	第35号填出土遗物(7)·····	213	第212图	第51号填 ·····	255
第176图	第35号填出土遗物(8)·····	214	第213图	第52号填 ·····	256
第177图	第35号填出土遗物(9)·····	216	第214图	第52号填遗物分布图(1)·····	257
第178图	第35号填出土遗物(10)·····	217	第215图	第52号填遗物分布图(2)·····	258
第179图	第36号填 ·····	220	第216图	第52号填遗物分布图(3)·····	259
第180图	第37号填 ·····	221	第217图	第52号填出土遗物(1)·····	260
第181图	第38号填 ·····	221	第218图	第52号填出土遗物(2)·····	261

第219図	第52号墳出土遺物3)	262	第256図	第36号住居跡	306
第220図	第52号墳出土遺物4)	263	第257図	第36号住出土遺物	307
第221図	第53号墳	264	第258図	第37号住居跡と出土遺物	308
第222図	第53号墳遺物分布図	265	第259図	第38号住居跡と出土遺物	309
第223図	第53号墳出土遺物	266	第260図	第39号住居跡と出土遺物	310
第224図	第54号墳	267	第261図	第40号住居跡と出土遺物	311
第225図	第54号墳出土遺物	267	第262図	第37号井戸跡と出土遺物	312
第226図	第1号埴輪棺	268	第263図	中・近世の遺構分布図	314
第227図	第1号埴輪棺接合関係図	269	第264図	第4号掘立柱建物跡	316
第228図	第1号埴輪棺(1)	270	第265図	第5号掘立柱建物跡	317
第229図	第1号埴輪棺(2)	271	第266図	掘立柱建物跡出土遺物	318
第230図	古墳時代後期の土壌藪	272	第267図	第6号掘立柱建物跡	319
第231図	グリッド出土遺物1)	273	第268図	第7・8号掘立柱建物跡	320
第232図	グリッド出土遺物2)	274	第269図	第9号掘立柱建物跡	321
第233図	グリッド出土遺物3)	275	第270図	第10号掘立柱建物跡	322
第234図	平安時代の遺構分布図	278	第271図	第11号掘立柱建物跡	323
第235図	第15号住居跡	280	第272図	第12号掘立柱建物跡	324
第236図	第15号住居物分布図	281	第273図	第13号掘立柱建物跡	325
第237図	第15号住出土遺物	282	第274図	第2・3・4・5・6・10・11号櫓列跡	326
第238図	第16号住居跡	283	第275図	第2・3・4・11号櫓列跡断面図	328
第239図	第20・21号住居跡と出土遺物	284	第276図	第5・6・10号櫓列跡断面図	329
第240図	第22号住居跡	286	第277図	第7・8号櫓列跡	330
第241図	第22号住出土遺物	287	第278図	第7・9号櫓列跡断面図	332
第242図	第23号住居跡	288	第279図	第8号櫓列跡断面図	333
第243図	第23号住出土遺物	289	第280図	第12・13号櫓列跡	334
第244図	第24号住居跡	290	第281図	第12・13号櫓列跡断面図	335
第245図	第24号住出土遺物	291	第282図	ピット群跡	336
第246図	第25号住居跡と出土遺物	292	第283図	溝跡・土壌配置分割図	337
第247図	第26号住居跡と出土遺物	294	第284図	溝跡・土壌分布図(1)	338
第248図	第29号住居跡	295	第285図	溝跡・土壌分布図(2)	339
第249図	第29号住出土遺物	296	第286図	溝跡・土壌分布図(3)	340
第250図	第30号住居跡と出土遺物	297	第287図	溝跡・土壌分布図(4)	341
第251図	第31号住居跡と出土遺物	299	第288図	溝跡・土壌分布図(5)	342
第252図	第32号住居跡と出土遺物	300	第289図	溝跡・土壌分布図(6)	343
第253図	第33号住居跡と出土遺物	301	第290図	溝跡断面図	344
第254図	第34・35号住居跡	302	第291図	溝跡出土遺物(1)	346
第255図	第34・35号住出土遺物	303	第292図	溝跡出土遺物(2)	347

第293図	近世の土壌墓と出土遺物	353	第317図	井戸跡出土遺物2)	384
第294図	土壌1)	354	第318図	井戸跡出土遺物3)	385
第295図	土壌出土遺物1)	355	第319図	古銭	388
第296図	土壌出土遺物2)	356	第320図	自由学園南・丸山東遺跡出土石器	392
第297図	土壌出土遺物3)	357	第321図	新屋敷・大和田高明・明花向遺跡の 切出彩石器	394
第298図	第76号土壌出土漆碗の家紋	361	第322図	新屋敷・大和田高明・明花向遺跡	395
第299図	土壌2)	363	第323図	柏ヶ谷長ヲサ遺跡1)	397
第300図	土壌3)	364	第324図	柏ヶ谷長ヲサ遺跡1)	398
第301図	土壌4)	365	第325図	湘南藤沢キャンパス内遺跡	400
第302図	土壌5)	366	第326図	多聞寺前遺跡	401
第303図	土壌6)	367	第327図	嘉留多遺跡	402
第304図	土壌7)	368	第328図	花沢東遺跡	404
第305図	土壌8)	369	第329図	自由学園南遺跡	405
第306図	土壌9)	370	第330図	はけうえ遺跡	406
第307図	土壌10)	371	第331図	提灯木山遺跡	408
第308図	土壌11)	372	第332図	若葉台遺跡	410
第309図	土壌12)	373	第333図	白幡前遺跡	411
第310図	井戸跡分布図	376	第334図	「下加南型高坏」を含む土器群	417
第311図	井戸跡1)	378	第335図	埼玉県内出土の五銖銭	423
第312図	井戸跡2)	379	第336図	新屋敷遺跡出土焼塩釜刻印	425
第313図	井戸跡3)	380	第337図	焼塩釜の編年	426
第314図	井戸跡4)	381	第338図	川口市赤山陣屋跡出土焼塩釜	426
第315図	井戸跡5)	382	第339図	新屋敷遺跡近世遺構変遷図	428
第316図	井戸跡出土遺物1)	383			

図 版 目 次

- 図版1 新屋敷遺跡全景(A・B・C区)
図版2上 新屋敷遺跡遠景(南西から)
下 新屋敷遺跡C区全景(南西から)
図版3上 新屋敷遺跡C区全景(北西から)
下 新屋敷遺跡C区全景(北東から)
図版4 石器集中分布状態
図版5上 石器集中1・2・3(上部)
下 石器集中1(上部)
図版6 石器集中1(下部)
図版7上 石器集中1(スクレイパー出土状態)
下 石器集中1(最下部)
図版8 石器集中2(上部)
図版9 石器集中2(下部)
図版10 石器集中5
図版11上 礫群4
下 礫群7
図版12上 石器集中6・礫群8・10
下 石器集中6
図版13上 石器集中6
下 石器集中6・礫群10
図版14 先土器時代の石器(1)
図版15 先土器時代の石器(2)
図版16 先土器時代の石器(3)
図版17 先土器時代の石器(4)
図版18 先土器時代の石器(5)
図版19 先土器時代の石器(6)
図版20 縄文時代の土壌(1)
図版21 縄文時代の土壌(2)
図版22上 縄文時代の土壌(3)
下 グリッド出土の縄文土器(1)
図版23 グリッド出土の縄文土器(2)
図版24 グリッド出土の縄文土器(3)
図版25 グリッド出土の縄文土器(4)
図版26上 グリッド出土の縄文土器(5)
下 グリッド出土の石器(1)
図版27 グリッド出土の石器(2)
図版28上 第1号墳
下 第2号墳
図版29 第4号墳(1)
図版30 第4号墳(2)
図版31 第22号墳(1)
図版32 第22号墳(2)
図版33 第23号墳
図版34 第24号墳
図版35 第25号墳(1)
図版36 第25号墳(2)
図版37 第25号墳(3)
図版38 第26号墳(1)
図版39上 第26号墳(2)
下 第27号墳
図版40 第28号墳
図版41 第29号墳(1)
図版42 第29号墳(2)
図版43上 第30号墳
下 第31号墳
図版44 第32号墳
図版45上 第33号墳
下 第34号墳
図版46 第35号墳(1)
図版47 第35号墳(2)
図版48 第35号墳(3)
図版49 第35号墳(4)
図版50上 第36号墳
下 第37号墳
図版51上 第38号墳
下 第39号墳
図版52 第40号墳
図版53上 第41号墳
下 第42号墳
図版54 第43号墳

- 図版55 第44号墳
 図版56 第45号墳
 図版57 第46号墳
 図版58 第47号墳
 図版59 第48号墳
 図版60 第49号墳
 図版61 第50号墳
 図版62 第51号墳
 図版63 第52号墳
 図版64 第53号墳
 図版65 第54号墳
 図版66 第1号円筒埴輪棺
 図版67 第13号住居跡(1)
 図版68 第13号住居跡(2)
 図版69上 第14号住居跡
 下 第17号住居跡
 図版70 第19号住居跡
 図版71 第27号住居跡
 図版72上 第28号住居跡
 下 第40号住居跡
 図版73上 第41号住居跡
 下 第42号住居跡
 図版74上 第44号住居跡
 下 第45号住居跡
 図版75上 第46号住居跡
 下 第47号住居跡
 図版76上 第48号住居跡
 下 第49号住居跡
 図版77 第15号住居跡
 図版78上 第16号住居跡
 下 第20号住居跡(1)
 図版79上 第20号住居跡(2)
 下 第21号住居跡
 図版80 第22号住居跡
 図版81上 第23号住居跡
 下 第24号住居跡(1)
 図版82 第24号住居跡(2)
 図版83 第25号住居跡
 図版84 第26号住居跡
 図版85上 第29号住居跡
 下 第30号住居跡
 図版86上 第31号住居跡
 下 第32号住居跡
 図版87上 第33号住居跡
 下 第34・35号住居跡(1)
 図版88 第34・35号住居跡(2)
 図版89 第36号住居跡
 図版90上 第37号住居跡
 下 第38号住居跡
 図版91上 第39号住居跡
 下 第43号住居跡
 図版92 掘立柱建物跡(1)
 図版93 掘立柱建物跡(2)・柵列跡
 図版94 井戸跡
 図版95 溝跡(1)
 図版96 溝跡(2)
 図版97 溝跡(3)
 図版98 土壌(1)
 図版99 土壌(2)
 図版100 土壌(3)
 図版101 土壌(4)
 図版102 土壌(5)
 図版103 土壌(6)
 図版104 土壌(7)
 図版105 土壌(8)
 図版106 土壌(9)
 図版107 古墳時代前期の土師器(1)
 図版108 古墳時代前期の土師器(2)
 図版109 古墳時代前期の土師器(3)
 図版110 古墳時代前期の土師器(4)
 図版111 古墳時代後期の土師器(1)
 図版112 古墳時代後期の土師器(2)
 図版113 古墳時代後期の土師器(3)
 図版114 古墳時代後期の土師器(4)

- | | | | |
|-------|----------------|-------|-----------------|
| 図版115 | 古墳時代後期の土師器(5) | 図版138 | 形象埴輪(6) |
| 図版116 | 古墳時代後期の土師器(6) | 図版139 | 形象埴輪(7) |
| 図版117 | 古墳時代後期の土師器(7) | 図版140 | 形象埴輪(8) |
| 図版118 | 古墳時代後期の土師器(8) | 図版141 | 形象埴輪(9) |
| 図版119 | 古墳時代後期の土師器(9) | 図版142 | 形象埴輪(10) |
| 図版120 | 古墳時代後期の土師器(10) | 図版143 | 形象埴輪(11) |
| 図版121 | 古墳時代後期の土師器(11) | 図版144 | 形象埴輪(12) |
| 図版122 | 古墳時代後期の須恵器(1) | 図版145 | 形象埴輪(13) |
| 図版123 | 古墳時代後期の須恵器(2) | 図版146 | 形象埴輪(14) |
| 図版124 | 古墳時代後期の須恵器(3) | 図版147 | 古墳時代の紡錘車(1) |
| 図版125 | 円筒埴輪(1) | 図版148 | 古墳時代の紡錘車(2) |
| 図版126 | 円筒埴輪(2) | 図版149 | 古墳時代の紡錘車(3) |
| 図版127 | 円筒埴輪(3) | 図版150 | 石製品・鉄製品・土製品 |
| 図版128 | 円筒埴輪(4) | 図版151 | 平安時代の須恵器(1) |
| 図版129 | 円筒埴輪(5) | 図版152 | 平安時代の須恵器(2) |
| 図版130 | 円筒埴輪(6) | 図版153 | 平安時代の須恵器(3) |
| 図版131 | 円筒埴輪(7) | 図版154 | 平安時代の土師器・須恵器(4) |
| 図版132 | 円筒埴輪(8) | 図版155 | 平安時代の須恵器(5)・紡錘車 |
| 図版133 | 形象埴輪(1) | 図版156 | その他の遺物 |
| 図版134 | 形象埴輪(2) | 図版157 | 漆器の漆幕 |
| 図版135 | 形象埴輪(3) | 図版158 | 中・近世時代の遺物 |
| 図版136 | 形象埴輪(4) | 図版159 | 古銭 |
| 図版137 | 形象埴輪(5) | | |

表 目 次

石器組成表	13	第46号墳出土遺物觀察表	246
石材組成表	13	第47号墳出土遺物觀察表	248
第13号住居跡出土遺物觀察表	107	第48号墳出土遺物觀察表	250
第14号住居跡出土遺物觀察表	110	第49号墳出土遺物觀察表	252
第19号住居跡出土遺物觀察表	114	第50号墳出土遺物觀察表	254
第27号住居跡出土遺物觀察表	116	第52号墳出土遺物觀察表	260
第28号住居跡出土遺物觀察表	117	第53号墳出土遺物觀察表	266
第41号住居跡出土遺物觀察表	119	第54号墳出土遺物觀察表	267
第42号住居跡出土遺物觀察表	122	第15号住居跡出土遺物觀察表	281
第44号住居跡出土遺物觀察表	125	第20・21号住居跡出土遺物觀察表	285
第45号住居跡出土遺物觀察表	127	第22号住居跡出土遺物觀察表	286
第46号住居跡出土遺物觀察表	129	第23号住居跡出土遺物觀察表	288
第47号住居跡出土遺物觀察表	130	第24号住居跡出土遺物觀察表	291
第48号住居跡出土遺物觀察表	133	第25号住居跡出土遺物觀察表	292
第49号住居跡出土遺物觀察表	134	第26号住居跡出土遺物觀察表	294
第50号住居跡出土遺物觀察表	135	第27号住居跡出土遺物觀察表	296
第1号墳出土遺物觀察表	142	第30号住居跡出土遺物觀察表	297
第2号墳出土遺物觀察表	143	第31号住居跡出土遺物觀察表	298
第4号墳出土遺物觀察表	148	第32号住居跡出土遺物觀察表	300
第22号墳出土遺物觀察表	158	第33号住居跡出土遺物觀察表	301
第23号墳出土遺物觀察表	167	第34・35号住居跡出土遺物觀察表	304
第24号墳出土遺物觀察表	169	第36号住居跡出土遺物觀察表	307
第25号墳出土遺物觀察表	174	第37号住居跡出土遺物觀察表	308
第26号墳出土遺物觀察表	178	第38号住居跡出土遺物觀察表	309
第28号墳出土遺物觀察表	183	第39号住居跡出土遺物觀察表	310
第29号墳出土遺物觀察表	190	第40号住居跡出土遺物觀察表	311
第32号墳出土遺物觀察表	195	第37号井戸出土遺物觀察表	312
第33号墳出土遺物觀察表	197	掘立柱建物跡出土遺物觀察表	318
第35号墳出土遺物觀察表	208	溝出土遺物觀察表	347
第36号墳出土遺物觀察表	220	第81号土塚墓出土遺物觀察表	353
第39号墳出土遺物觀察表	223	土壙出土遺物觀察表	358
第40号墳出土遺物觀察表	229	土壙一覽表	374
第43号墳出土遺物觀察表	236	井戸一覽表	382
第44号墳出土遺物觀察表	242	井戸出土遺物觀察表	386
第45号墳出土遺物觀察表	244	古銭一覽表	390

I. 調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

近年の首都圏地域での人口増加には著しいものがあるが、とりわけ首都圏に隣接した埼玉県地域の増加は顕著である。こうした急激な人口増加に伴う市街化現象は、その一方で様々な方面へと影響を及ぼしているが、とりわけ県民の住空間の確保についての要望には切実なものが多くなっている。こうした状況を鑑み、埼玉県では各種の都市・土地政策を通じて県民の要望に答えるべく迅速な対応を行っているが、住宅政策もその一環として位置付けられている。

県教育局生涯学習部文化財保護課では、文化財保護の観点よりこうした各種公共事業開発に対して迅速、且、適切な調節を行うため、国や県の開発関係部局や公社・公団と事前協議を実施し、漏漏のないよう慎重に調整を進めているところである。

鴻巣市東4丁目の農業試験場跡地利用については、国や県などによって開発事業の計画がなされていたが、その一部が埼玉県住宅供給に払い下げがおこなわれた。平成元年12月20日付け元埼玉公企第109号で、埼玉県住宅供給公社理事長より、教育長あて「埋蔵文化財の所在の有無とその取扱いについて(照会)」の文書が提出された。

農業試験場跡地については周知の埋蔵文化財包蔵地(新屋敷遺跡)の所在することが知られていたが、その詳細な範囲と分布等については不明な点があったので、協議を踏まえて文化財保護課で確認調査を実施し、

平成元年12月25日付け教文第1274号をもって、埼玉県住宅供給公社理事長あて次のとおり回答した。

1. 建設予定地内には、縄文・古墳・奈良・平安各時代の集落跡及び古墳跡を含む新屋敷遺跡が所在すること。

2. 上記の取扱いについては現状保存が望ましいが、事業計画上やむを得ず現状変更を行う場合には、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づき、文化庁長官あての発掘届を提出するとともに、記録保存のための発掘調査を実施すること。

なお、発掘調査の実施にあたっては教育局指導部文化財保護課と協議すること。

共同住宅建設予定地における埋蔵文化財の取扱いについては、埼玉県住宅供給公社と文化財保護課とのあいだに於いて保存を前提とした協議を重ねてきたが、事業性格上で変更は極めて困難であったので、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

これにより、埼玉県住宅供給公社と(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団とは、発掘調査に係る委託契約を結び、文化財保護法第57条の3に基づく発掘届が、また(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団からは発掘調査届けが、それぞれ文化庁長官あて提出された。発掘調査は平成5年4月1日から開始された。

なお、文化庁長官から(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長あて、平成5年6月29日付け委保5-641で発掘通知を受理した旨の通知があった。

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

新屋敷遺跡C区の発掘調査は、平成5年4月1日から平成6年7月31日にかけて行われた。

平成5年4月1日から発掘調査の準備を始め、4月末までにプレハブの設置を行い、それと同時に調査区内に存在する雑木の伐採や片付け、農業試験場の際に作られた籬壇状に造成されたコンクリートの擁壁の撤去等を行い、5月中頃までに終了した。

整地が完了してから、表土除去を始めたが、調査区内で残土を反転させるため、調査区内の約半分の面積の表土除去を5月中に終了した。

6月から本格的な調査にはいるが、雨天日が多く、なかなか作業が進展しなかった。調査は調査区北側から行い、B区周辺を最初に調査した。B区の前遺跡の未調査部分を始めとして、順次南へ向かって調査を進めた。9月11日には現地説明会を行い、1000人以上を越える参加者を得、遺跡への関心の高さが窺えた。

10月中頃までに調査区の一部を残して北半分の調査を終了、航空測量と写真を撮影した。

11月中頃までに埋め戻しと、残土の反転、南半分の調査区の表土除去を終了し、北半分の残りの調査区と合わせて調査を進めた。また、台地の肩部に存在が確認された先土器時代の調査も、同時に開始した。特に、先土器時代の遺構は北西側の谷頭部周辺に集中していたため、この部分の調査は3月末まで続いた。

3月末までには、南側調査区の調査をほぼ終了し、航空測量と写真の撮影を終了した。また、プレハブ敷地内を調査するため、3月の始めに引越を完了し、表土剥ぎを終了した。

平成6年4月から、前年度調査区の残務整理と、プレハブ敷地内の調査をおこなった。プレハブ敷地内は調査区の南東部に位置し、A区の北側に位置しており、鴻巣市の調査地点に隣接していたため、それ等から連続する遺構から調査し始めた。

7月末までに調査を終え、航空撮影等を行い、調査を全て終了した

(2) 整理作業

整理作業は平成6年4月1日～12月31日までと、平成7年4月1日～平成8年3月31日まで行った。

平成6年の4月1日から図面整理を中心に、合わせて出土遺物の分類と、接合を行った。

4月～7月は、主に平成5年度に調査した遺構の図面整理をおこない、平成6年度の調査が終わった7月以降に、その部分の図面整理と、総合的な全体図について整理した。

また、この間、古墳跡出土の遺物と平安時代の住居跡出土遺物を中心として接合を進めた。

8月からは、古墳跡や平安時代の住居跡の遺構を中心として、版下である第二原図の作成を開始した。また、出土遺物の復元も開始した。

9月からは古墳時代前期の集落、中・近世の遺構に関して図面整理と、遺物整理を行い、復元を進めた。10月からは、古墳時代の出土遺物、平安時代の出土遺物、中・近世の出土遺物の実測を行った。

12月末までには、古墳時代、平安時代、中・近世の遺構及び遺物に関しては、おおかたの版下の第二原図の作成を終了した。

平成7年4月からは、平成6年度に作成した第二原図のトレースを行い、版下作成作業を開始し、同時に、先土器時代の遺物の整理も開始した。

4～7月は先土器時代、縄文時代の図面整理を行うと共に、石器と土器の接合作業を行った。また、古墳時代前期の出土遺物も実測を開始した。

8～9月は先土器時代の石器の実測と、縄文土器の拓本採りを行った。また、遺構の版組みも同時進行し、ほぼ組終えた。

11～12月末までには遺物の版組みと、写真撮影を終了して、遺構、遺物の割り付けをほぼ完了した。

1月から原稿執筆を開始し、2月に原稿執筆、編集を終了して印刷校正に入り、3月31日に本報告書を刊行した。

3. 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査 (平成5、6年度)		(2) 整理作業 (平成6、7年度)	
理事長	荒井 桂	理事長	荒井 桂
副理事長	富田真也	副理事長	富田真也
専務理事	横川好富 (H5)	専務理事	栃原嗣雄 (H6)
	栃原嗣雄 (H6)		古川國男 (H7)
常務理事兼管理部長	柴崎光生 (H5)	常務理事兼管理部長	加藤敏昭 (H6)
	加藤敏昭 (H6)		荒井秀直 (H7)
理事兼調査部長	中島利治 (H5)	理事兼調査部長	小川良祐
	小川良祐 (H6)	管理部	
管理部		庶務課長	及川孝之
庶務課長	萩原和夫 (H5)	主 査	市川有三
	及川孝之 (H6)	主 事	長滝美智子
主 査	賛田 清 (H5)		菊池 久
	市川有三 (H6)	経 理 課 長	関野栄一
主 事	菊池 久	主 任	江田和美
	長滝美智子 (H6)	主 事	福田昭美
経 理 課 長	関野栄一		腰塚雄二
主 任	江田和美	資料部	
主 事	長滝美智子 (H5)	資 料 部 長	塩野 博
	福田昭美	資料部副部長兼整理第一課長	谷井 彪
	腰塚雄二	主任調査員	大谷 徹
調査部			金子直行 (H7)
調査部副部長	高橋一夫		
調査第一課長	坂野和信 (H5)		
調査第四課長	酒井清治 (H6)		
主任調査員	昼間孝志		
	金子直行 (H5)		
	大谷 徹 (H5)		
	田中正夫 (H6)		
調査員	西山真理子 (H5)		
	熊沢孝之 (H6)		

II. 遺跡の立地と環境

新屋敷遺跡は鴻巣市東4丁目384番地他に所在し、JR高崎線鴻巣駅の北東約0.9kmの位置にあたる。

鴻巣市は埼玉県の中央よりやや東に位置し、行政区では東は北埼玉郡騎西町、南埼玉郡菫藩町、西は北足立郡吹上町と旧荒川を境として比企郡吉見町、南は桶川市・北本市、北は行田市・北埼玉郡川里村に接している。市のほぼ中央部を旧中山道を挟んでJR高崎線と国道17号が縦断し、東部の低地部を上越新幹線が通過している。

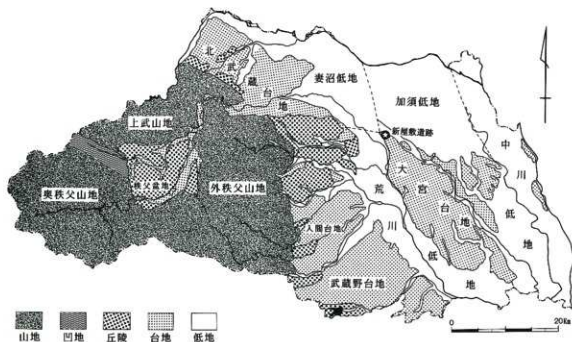
地形的には大宮台地が北西方向に半島状に突き出した位置に所在し、東側を元荒川、西側を荒川がそれぞれ南流し、加須低地、荒川低地と呼ばれる肥沃な沖積低地を形成している。また元荒川流域には自然堤防が帯状に発達し、従来は遺跡の分布が知られていなかった自然堤防上にも、近年の調査により遺跡の発見が相次いでいる(第1図)。

新屋敷遺跡は元荒川に向かう台地東側斜面に位置し、遺跡の標高は14~19mを測る。調査区内は農林水産省

農事試験場の実験圃場として利用されていたため難段状の造成が行われ、旧地形が大きく改変されていた。現状では旧地形を復元することは難しいが、標高15~16mラインを境に上位・下位段丘面に大きく分けられる。また段丘面を画するように調査区の北端と東側から湾入する二つの埋没谷が確認されており、地表面からの観察以上に複雑な微地形を形成していることが明らかにされた。

遺跡周辺における台地部の標高は鴻巣市原馬室付近で約25mを測り、北と東に向かってなだらかに傾斜している。一方、台地西側縁辺部は荒川低地と約8mの比高差を測りやや急峻であるが、その崖線も北に行くにつれ低くなり、鴻巣市箕田付近で洪積台地は河川の堆積土によって埋没し、自然堤防状の微高地となっている。また台地の西側縁辺部は、荒川低地に向かって多くの小支谷が発達しているのに対して、東側縁辺部は比較的緩やかに低地部へ移行し、台地部と低地部の境界は不明瞭となる。このような地理的条件から、遺

第1図 埼玉県地形図



跡の分布は荒川水系と元荒川水系の台地縁辺部に沿って数多く分布している(第2図)。

先土器時代の遺跡は、大宮台地西縁部の宮前遺跡、城山遺跡、赤台遺跡、東縁部の生出塚遺跡、新屋敷遺跡、埋没台地上の中三谷遺跡等が確認されている。

新屋敷遺跡では昭和61年に市教育委員会が実施した第1次調査の際に、ナイフ形石器、尖頭器、大形剥片等が発見されていた。C区の調査区は前回の調査地点に隣接しており、先土器時代の遺跡の発見が期待されていた。調査の結果、埋没谷の谷頭を囲むように複数の石器集中や礫群が検出され、黒曜石製のナイフ形石器、頁岩製の尖頭器等の石器群がまとめて検出され、大宮台地北部における良好な資料を提供した。

周辺では新屋敷遺跡の南側に隣接する生出塚遺跡からナイフ形石器が出土しているほか、埋没台地上に立地する中三谷遺跡からはナイフ形石器、角錐状石器等が検出され、武蔵野台地第IV層に對比される良好な石器群が出土している。また荒川左岸の赤台遺跡から出土したナイフ形石器は、瀬戸内地方に特徴的な国府型ナイフ形石器に類似し、特筆される。

縄文時代の遺跡は、大宮台地の縁辺及び自然堤防上に多くの遺跡が分布している。草創期の遺物には富士山南遺跡から爪形文土器が出土している。早期の遺跡は捺糸文土器から馬室小学校庭内遺跡から、押型文土器から中三谷遺跡から出土し、権現遺跡、赤台遺跡では条痕文土器を伴う住居跡、炉穴等が調査されている。前期の代表的な遺跡としては赤台遺跡、二本木遺跡、城山遺跡等が知られている。中期の遺跡には中期前半の大間原遺跡、中期後半の赤台遺跡からまとまった資料が出土している。後・晩期の遺跡には、埋没台地上の中三谷遺跡と台地部の権現遺跡等が知られ、周辺には、川里村赤城遺跡が存在している。

新屋敷遺跡C区の調査では、草創期の石斧と有茎尖頭器が出土しているほか、中期の浅鉢が埋没谷部分から発見されている。遺構としては縄文時代のTピット8基が検出されたただけである。なお、隣接するD区の調査では中期段階の住居跡1軒が確認されている。

弥生時代の遺跡の分布はやや希薄で、市域では登戸新田遺跡で方形周溝墓が調査されているが、現状では、集落遺跡の調査例はほとんどない。登戸新田遺跡の方形周溝墓からは弥生町式の網目状捺糸文を施した壺形土器と吉ヶ谷式の壺形土器が伴っており、両土器分布圏の接壤地域として注目される。

古墳時代における集落遺跡は古墳時代前期の住居跡が調査された宮前本田遺跡、大間原遺跡、馬室小学校庭内遺跡、下間遺跡、新屋敷遺跡等が知られる。新屋敷遺跡では現在までに五領期から和泉期にかけての住居跡が2溝調査され、古墳群形成以前に生活域としての痕跡が残されていたことが明らかにされた。

また前期から後期に継続して営まれた集落として赤台遺跡、中三谷遺跡、生出塚遺跡等が挙げられる。このうち生出塚遺跡は、新屋敷遺跡の南側に隣接し本来は同一の遺跡群と把握されるもので、現在までの調査で埴輪窯跡38基、工房跡1基、粘土採掘場1基、住居跡9軒、古墳跡18基等が検出されている。県内でも有数の埴輪製作遺跡として知られ、埴輪窯だけでなく工房や工人集落、粘土採掘場など埴輪生産に関わる一連の遺構が検出され、埴輪製作遺跡の全容が解明されつつある。生出塚遺跡から埴輪が供給された古墳には、新屋敷遺跡をはじめ、埼玉古墳群、笠原古墳群、小沼耕地遺跡等の元荒川流域の古墳群を中心に供給され、さらには千葉県市原市山倉1号墳等の遠距離供給された可能性も指摘されている。また荒川に面した大宮台地西縁には馬室埴輪窯跡が存在しており、埴輪の需給関係の様相の解明が今後の大きな課題と言えよう。

周辺の古墳群としては、北西約7.5kmに行田市埼玉古墳群が存在しているのをはじめ、元荒川流域では北から吹上町袋・古古墳群、鴻巣市箕田古墳群、生出塚古墳群、安養寺古墳群、笠原古墳群、騎西町小沼耕地遺跡、東浦古墳、菖蒲町天王山古墳を含む栢山古墳群、蓮田市椿山古墳群等が存在している。一方荒川流域では北から鴻巣市糠田古墳群(消滅)、馬室古墳群、北本市北袋古墳群、中井古墳群、八重塚古墳群、桶川市川田谷古墳群等が連続と分布している。

第2図 遺跡周辺の地形図 新田



奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代の遺跡数に比べると少なく、宮前本田遺跡、赤台遺跡、宮地3丁目遺跡、中三谷遺跡、新屋敷遺跡等が調査されているにすぎない。このうち赤台遺跡では8世紀前半代の住居跡と総柱の2×2間の掘立柱建物跡等が検出され、奈良時代前半期の集落の一端が明らかにされている。また宮前本田遺跡第2次調査では、8世紀初頭頃の住居跡1軒が調査されている。8世紀後半代の集落としては富士山南遺跡、宮前遺跡、中井遺跡等が知られるが、調査例が少なく実態は明確でない。

9世紀代の集落の調査例は比較的多く、赤台遺跡、稲荷町遺跡、登戸新田北遺跡、中三谷遺跡、新屋敷遺跡、新屋敷北遺跡等が知られている。中でも新屋敷遺跡は現在までの調査で9世紀後半から10世紀前半にかけて営まれた100軒前後の住居跡が確認されており、元荒川流域では傑出した規模の集落遺跡であることが判明している。また新屋敷遺跡の北側に隣接する新屋敷北遺跡は本来は同一の集落と把握されている。

他に荒川左岸の鴻巣市大間には清和源氏の始祖源経基の居館の伝承をもつ伝源経基館跡が存在している。「将門記」に伝える武藏権守典世王・介源経基と足立郡司武蔵武芝・平将門の争乱の記事にある「経基之當所」に比定されているが、伝承の通り平安時代末期に存立したものは明確でない。

中世の遺跡としては、九右衛門遺跡、宮前本田遺跡、富士山遺跡、生出塚遺跡、中三谷遺跡、新屋敷遺跡等から当該時期の遺構・遺物が検出されている。このうち新屋敷遺跡の東約0.7kmに位置する中三谷遺跡では北辺長約107mのコの字形に巡らされた堀跡が検出さ

れている。台形に近い方形館の一部と推定され、13世紀代の渥美産と常滑産の甕が出土している。新屋敷遺跡で確認された中世の遺構と時期的に概ね一致しており、両者の関連性が今後問題になると思われる。また時期は下がるが、新屋敷遺跡の第2次調査の際に室町時代の金銅製懸仏が出土しており注目される。

近世の遺跡としては鴻巣御殿跡、赤台遺跡、生出塚遺跡、新屋敷遺跡等が知られている。

鴻巣御殿跡は、新屋敷遺跡の南西約1kmのJR鴻巣駅東側の旧中山道に面した旧東照宮跡に比定されている。「武州文書」によれば文禄2年(1592)に徳川家康は関東代官頭(後に関東郡代)伊奈忠次に命じて、領内視察や鷹狩のための宿所として鴻巣に御殿を築かせている。鴻巣御殿は家康・秀忠・家光の鷹狩の休泊施設にあてられていたが、延宝8年(1680)徳川綱吉が五代将軍となり、貞享2年(1685)に「生類憐みの令」が出された後の、元禄年間(1688~1703)頃に廃止されたとされている。最近、国立歴史民俗博物館によって鴻巣御殿跡の発掘調査が実施され、建物の基壇及び礎石の一部などが検出されている。「江戸図屏風」に描かれている鴻巣御殿の建物配置と、確認された遺構との関連性が今後の検討課題であろう。

また「新編武蔵風土記稿」の小名新屋敷の項に「古へ鴻巣御殿ありし頃、御鷹部屋ありし所」と記されており、新屋敷遺跡周辺に鷹部屋が置かれていた伝承が残されている。鷹部屋とは、將軍から預かった鷹を飼育調教をする鷹匠などが勤務するところで、鴻巣御殿とはほぼ同じ頃に設置され、「生類憐みの令」によって廃止されたものと推定されている。

周辺の遺跡

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------|----------|----------|----------|---------|------------|-----------|----------|----------|-------------|------------|-----------|----------|------------|-----------|-----------|-----------|------------|-------------|------------|-------------|------------|-----------|----------|------------|-----------|-----------|----------|-------------|-------------|----------|----------|
| 1. 新屋敷遺跡 | 2. 埼玉古墳群 | 3. 愛宕古墳群 | 4. 若王子古墳 | 5. 小針遺跡 | 6. 真名板高山古墳 | 7. 安養寺古墳群 | 8. 中三谷遺跡 | 9. 笠原古墳群 | 10. 宮地3丁目遺跡 | 11. 新屋敷北遺跡 | 12. 生出塚遺跡 | 13. 中井遺跡 | 14. 九右衛門遺跡 | 15. 稲荷町遺跡 | 16. 箕田古墳群 | 17. 富士山遺跡 | 18. 富士山南遺跡 | 19. 宮前本田北遺跡 | 20. 宮前本田遺跡 | 21. 登戸新田北遺跡 | 22. 登戸新田遺跡 | 23. 二本木遺跡 | 24. 城山遺跡 | 25. 伝源経基館跡 | 26. 大間原遺跡 | 27. 馬室古墳群 | 28. 下関遺跡 | 29. 馬室小校庭遺跡 | 30. 馬室榎輪窯跡群 | 31. 赤台遺跡 | 32. 権現遺跡 |
|----------|----------|----------|----------|---------|------------|-----------|----------|----------|-------------|------------|-----------|----------|------------|-----------|-----------|-----------|------------|-------------|------------|-------------|------------|-----------|----------|------------|-----------|-----------|----------|-------------|-------------|----------|----------|

現在までの新屋敷遺跡の調査で鷹部屋に関連した遺構として、第2次調査及びA区の調査において検出された幅4.5～5 m、深さ2 mの構堀をもつ施設が比定されている。しかし、この構堀が埋まった段階に掘られた土層から17世紀後半の瀬戸・美濃系の天目茶碗が出土しているため、17世紀の後半には既に構堀としての機能はなくなっていたものと指摘されている。現状では構堀の掘削時期の上限を示す良好な遺物の出土はないが、中世的な箱葉研堀であることや、鷹の飼育に必要な餌としての動物遺存体の検出例等もほとんどないことから、積極的に鷹部屋に関連した施設と断定し得る根拠に乏しく、今後検討が必要であろう。

今回のC区の調査で確認された17世紀後半を中心とする屋敷跡は、鴻巣御殿の存続期間にはば重なり、出土遺物に焼塩壺や茶道具類のような御府内の武家屋敷等から出土することの多い遺物が含まれていることなどを考え合わせると、鴻巣御殿に関連した屋敷地の蓋然性が高いものと考えられる。また出土遺物の様相からすれば、鴻巣御殿廃止以後も、屋敷地として存続していた可能性が強い。さらに隣接するD区及び生田塚遺跡の調査成果をふまえると、かなり広範囲に江戸期の屋敷地が展開していたことが予想される。

このように新屋敷遺跡は先土器時代から既に人びとが生活の痕跡を残し、その後、縄文時代、古墳時代、平安時代、中・近世の各時代にわたって、ムラとして、古墳群として、さらには屋敷地と性格を変えながら利用されてきたことが明らかとなった。

ここで、これまでの新屋敷遺跡関連の調査の経過に

【新屋敷遺跡関係文獻】

埼玉県教育委員会 1986『埼玉県埋蔵文化財調査年報』昭和60年度

埼玉県教育委員会 1987『埼玉県埋蔵文化財調査年報』昭和61年度

鴻巣市 1989『鴻巣市史』資料編1 考古

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1992『新屋敷遺跡—B区—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第123集埼玉県教育委員会 1993『埼玉県埋蔵文化財調査年報』平成3年度

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994『新屋敷遺跡—A区—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第140集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1995『埼玉県埋蔵文化財調査事業団年報』15 平成6年度

について簡単にまとめておきたい。

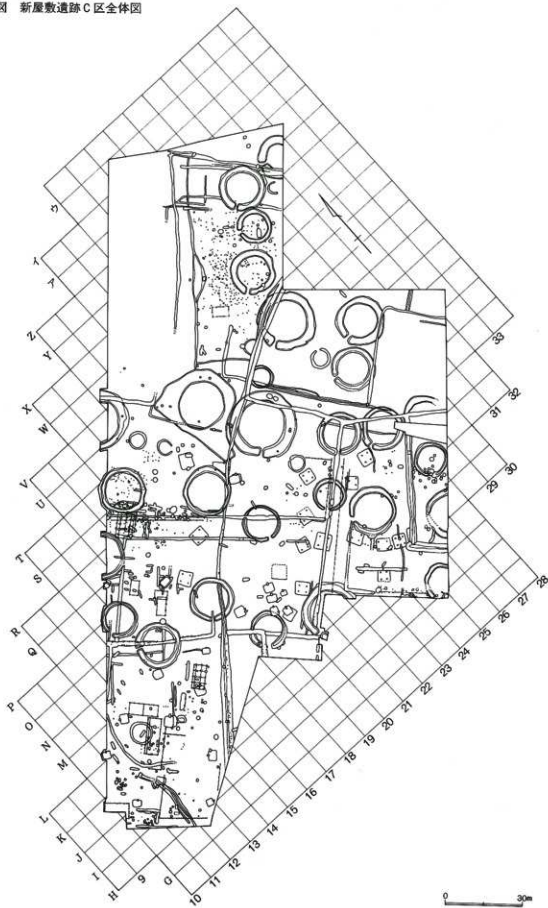
新屋敷遺跡の調査は、鴻巣市教育委員会による昭和60年の第1次調査を契機として、平成7年度までに市教育委員会により3次、当事業団により4地区で発掘調査が実施され、62,000㎡を越す広大な面積がこれまでに調査されている（第3図）。

昭和60年に鴻巣市教育委員会が発掘主体となって第1次調査を道路拡幅工事に伴い実施したのを端緒に、昭和62年に宅地造成に伴い第2次調査が実施され、先土器時代の遺物の発見をはじめ、生田塚遺跡周辺に古墳群が展開していることや、近世の屋敷跡の存在が明らかにされた。

次いで、平成3年度には当事業団が発掘主体者となり第3次調査として鴻巣警察署改築工事に伴うA区の調査と、第4次調査として鴻巣保健所の建設に伴うB区の調査が実施された。また同じ年、市教育委員会が発掘調査として道路拡幅工事に伴い調査を行い、6世紀前半を中心に営まれた群集墳の実態が明らかにされたほか、各時代の遺構・遺物が検出された。

今回報告するC区の調査は第6次調査にあたり、平成5・6年度に住宅供給公社の委託を受けて発掘調査を実施したものである。またC区の調査終了後、引き続き隣接地のD区の調査を第7次調査として当事業団が、合同宿舍鴻巣住宅建設工事に伴い平成6年7月から平成7年9月まで調査を実施した。D区では新屋敷遺跡では唯一の前方後円墳が調査され、多大な成果が挙げられている。

第4图 新屋敷遺跡C区全体図



III. 遺跡の概要

新屋敷遺跡C区の調査区は、本来、南西から北東方向へ細長い長方形であるが、北東コーナーにB区が、南東コーナーにA区が存在し、それらの調査区に挟まれる様に凸状の形をした25670㎡の調査区である。今回の調査では先土器時代から縄文時代、古墳時代、平安時代、中・近世の遺構が発見されており、A区、B区の成果と合わせると内容の濃い複合遺跡であることが判明してきた。

C区の調査成果の概要を、時代順に説明していく。

先土器時代は、2枚の文化層が確認され、およそQ～V-19～24区に集中して6箇所の石器集中区と10箇所の礫群が検出された。この地区は台地の斜面部にあたり、調査区の北西コーナーから第40号墳の下にかけて開折谷が存在し、第40号墳はこの埋没谷の上に形成されていた。この埋没谷の谷頭部分を囲む様に先土器時代第1文化層の礫群や石器集中区が存在し、その分布が台地の肩部へも延びていた。集中区と礫群は重複している場合が多く、集中区とはいえども広範囲に漫然と石器が分布する状況を示すものもあった。石器群は黒曜石製のナイフ形石器を中心とし、角錐状石器や搔器等が出土しており、第1文化層はおおよそ立川ロームIV層下部の様相を持つ。また、第2文化層は頁岩製の尖頭器を中心とするもので、数は少ないが谷頭付近で第1文化層に重なる様に存在していた。

縄文時代はTピットと呼ばれる土壌が8基検出されただけで、他の明瞭な遺構は検出されなかった。遺物は早期から晩期までの土器群が出土しており、中期の浅鉢の大型破片が調査区東側の埋没谷の中から出土した。周辺を精査したが、遺構の存在は確認されなかった。

古墳時代の前期では集落跡が検出され、17軒の住居跡が確認された。住居跡は、台地上に形成されており比較的にまとまって存在している。しかし、住居跡が存在する部分は、ちょうど棚壇状の造成が行われていたところで、この擾乱によって大半の住居跡が覆土が

浅いか、もしくは床面だけとなっている。場合によっては、擾乱で消滅してしまった住居跡が存在していた可能性も残されている。

また、古墳の周溝に古墳時代前期の土器群が混在しており、古墳によって消滅した住居跡があることも考慮すると、住居跡数は増える可能性が高い。

古墳時代の後期では6世紀初頭を中心として、5世紀末から6世紀中頃までの古墳跡を36基調査した。その内、4基が既に調査されたものの未調査部を調査したもので、新たに発見された古墳跡は32基であった。他に、円筒埴輪棺が1基、土壌墓が5基、周溝内土壌墓が1基検出された。

古墳は殆どが円墳であるが、第40号墳のみ周溝が張り出すものである。円墳には大型のものと、小型のものが存在し、大半の古墳にはブリッジが存在するが、小型の古墳にはないものも存在する。主体部は全て削平されていたが、調査区の南端に存在する第51号墳のみに木棺直葬の主体部が存在していた。

古墳には埴輪を持つものと、持たないものがあり、大半の古墳には埴を中心とした祭祀用の土師器が副葬されていた。なかには、紡錘車を副葬するものも目立ち、ブリッジの左右のいずれかに祭祀を行うのが特徴的であった。

平安時代では21軒の住居跡と井戸1基が検出された。集落はA区から連続するものであるが、重複したり、竈を付け代えたりする住居跡が目だった。

中世では、B区付近でピット群や土壌、溝が確認されたが、明瞭に配置関係を掴むのが困難であった。遺物は、溝より常滑の甕の破片が出土した。

近世では台地上の調査区南側にかけて、溝による地割りの中に、掘立柱建物跡が10棟、櫓列が12本、井戸が51基、土壌墓が1基検出され、その他時期不明瞭な多数の溝と土壌が検出された。

IV. 先土器時代の調査

1. 調査の概要

新屋敷遺跡C区から、検出された先土器時代の石器群は、岩宿II期と尖頭器の2時期である。また、縄文時代草創期の石斧と有茎尖頭器が出土しているが、資料点数が少ないので、本項に含め説明した。

岩宿II期は、石器集中6箇所、礫群10基が検出された。石器集中及び礫群は、埋没谷を開むように幾つかの纏まりをもって分布している。纏まりは石器集中、礫群ともに3つのグループとして捉えられた。石器石材は、黒曜石が全体の87%を占め、剥片石器類はほとんどが黒曜石製である。

尖頭器石器群は、市教育委員会が1986年に実施した調査において出土しており、今回の調査区が、その地点と隣接するため、調査開始当初から存在が予想された。しかし、本調査区では纏まった資料はなく、3点がそれぞれ単独で出土しただけであった。

2. 層位

土層の堆積は、台地部と埋没谷の埋土で異なっている。基本層は、台地の層序をローマ数字、埋没谷の埋土をアルファベットの小文字で示した。

【台地部】

第I層：表土（耕作土）

第II a層：褐色土 ローム粒子を少量含む、谷部は鉄斑を多く含む

第II b層：暗褐色土 ローム粒子を少量含む

第III層：暗灰褐色土 黒色土ブロック、白色粒子を多量に含む（As-YP層）

第IV層：黄褐色土 ハードローム層（As-OP2混在）

第V層：暗黄褐色土 白色粒子を多く、赤色粒子を少量含む

（IV・V層から石器は出土する）

第VI層：黄褐色土 白色粒子を多く含む

（IV・V層は色調が暗く、黒色帯と思われる）

第VII a層：暗黄褐色土 白色粒子を多く含む、ブロック状になる部分もあり、赤色粒子を少量含む

第VII b層：暗黄褐色土 白色粒子が多く混入、黄褐色ブロックを含む

第VIII層：褐色土 赤色粒子、白色粒子、褐色ブロックを含む

第IX層：暗褐色土 赤色粒子を多く含む
（VIII・IX層は黒色帯）

第X層：明黄褐色土 粘性が強い

【埋没谷】

a層：灰白色粘土質 粘性が強い

b層：暗灰褐色土

c層：暗灰褐色土 炭化物を少量含む、硬質土

d層：暗褐色土 粘性強く、やや軟質

e層：黄灰色褐色粘質土 きめの細かい粘土層

f層：暗灰褐色土 硬質で緻密

g層：暗褐色粘土 軟質

h層：青灰褐色粘質土 粘性が強い、きめは細かい

Aライン（第7図）：調査区の西側、R19・S19グリッドの南北方向の土層断面である。埋没谷から離れているため、水平堆積である。

Bライン（第7図）：R20・S20グリッドの東壁の土層断面である。土層の堆積は、僅かに北側に傾斜しているが、ほとんど水平堆積である。黒色帯に挟まれたVII層がaとbに細分できる。

Cライン（第7図）：埋没谷の中央に、直角方向の土層断面。R20・S20グリッドの東壁である。土層堆積は、R20グリッドまでは水平堆積、そこから北側は、谷に向かってV層より下位の層位が割られ急激に傾斜し、埋没谷の埋土が堆積している。III層は埋土を覆っており、ほぼ水平堆積である。II層はaとbに細分できる。

Dライン（第8図）：調査区の東側、Q24・R24・S24・T21グリッドの南北方向の土層断面である。土層

器種組成表

	ナイフ形石器	角錐状石器	掻・削器	石 核	剥 片	砕 石	敲 石	磨 石	合 計
石器集中1	1		3	4	40	139	1	13	201
石器集中2	1		3	2	10	18		2	36
石器集中3	2		1	2	8	37			50
石器集中4	3		1		5	33	1		43
石器集中5	7	2	5	3	25	146			188
石器集中6	3		1	3	10	26		8	51
合 計	17	2	14	14	98	399	2	23	569

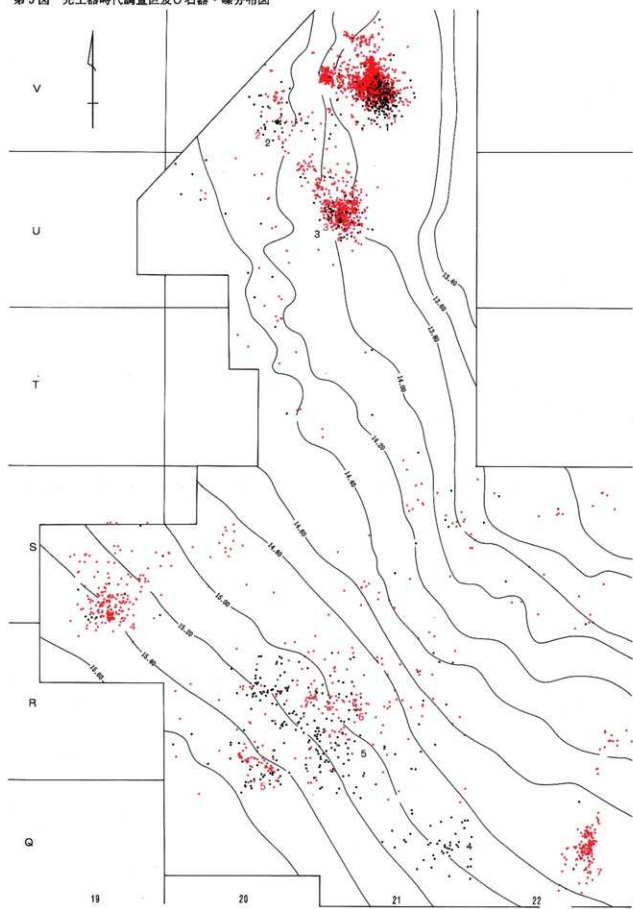
	ナイフ形石器	角錐状石器	掻 器	石 核	剥 片	砕 石	敲 石	磨 石	その他	尖頭器	合 計
Q 2 1						2					2
Q 2 2					1	1					2
Q 2 3					1	1					2
R 1 9								1			1
R 2 0			1		2	1					4
R 2 1					1	5					6
R 2 2	1										1
R 2 3						1					1
R 2 4		1	1								2
S 1 9					4	3		10			17
S 2 1	1				3	1					5
S 2 2					2	2				1	5
S 2 3			2	1	1	1		1			6
S 2 4					3	3					6
T 2 0	1								1		2
T 2 1	2										2
U 2 0	1				4	3					8
U 2 1			1			1				1	3
その他	6		1	4							11
合 計	12	1	6	5	22	25	0	12	1	2	86

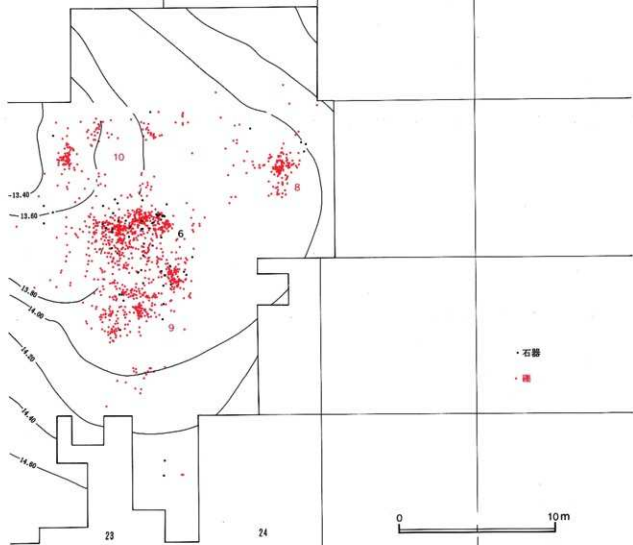
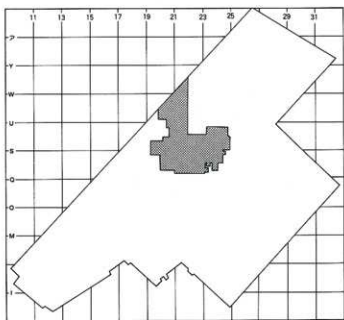
石材組成表

	黒曜石	黒色安山岩	安山岩	チャート	ホルンフェルス	珪質頁岩	珪質岩	黒色頁岩	頁 岩	砂 岩	合 計
石器集中1	172		15					13		1	201
石器集中2	32		4								36
石器集中3	48						1		1		50
石器集中4	40		1	1		1				1	43
石器集中5	182	1		3			1		1		188
石器集中6	39	1	8	1	2						51
合 計	513	2	27	5	2	1	2	13	2	2	569

	黒曜石	安山岩	黒色安山岩	黒色頁岩	チャート	硬質頁岩	頁 岩	ホルンフェルス	緑色岩	砂 岩	合 計
Q 2 1	1						1				2
Q 2 2	2										2
Q 2 3	1		1								2
R 1 9			1								1
R 2 0	4										4
R 2 1	5										5
R 2 2	1					1					2
R 2 3	1										1
R 2 4	2										2
S 1 9	4	8	3							2	17
S 2 1	2			2			1				5
S 2 2	4					1					5
S 2 3	5	1									6
S 2 4	5				1						6
T 2 0	1								1		2
T 2 1	2										2
U 2 0	8										8
U 2 1	2					1					3
その他	8						2			1	11
合 計	58	9	5	2	1	3	4	0	1	3	86

第5図 先土器時代調査区及び石器・礫分布図





はほぼ水平堆積である。Bライン同様、VII層がaとbに細分できる。

Eライン(第7図)：Aラインの東側に近接する。Q20・R20グリッドの西壁を東側から見ている。掘り下げはVI層下面までで、一部X層まで下げた。堆積の状況はAライン同様、ほぼ水平である。

Fライン(第7図)：Aラインの東側に近接する。T20・U20グリッドの南北方向の土層断面で、掘り下げは、VI層下面まで、堆積の状況はほぼ水平である。

Gライン(第9図)：調査区の中央、埋没谷を横断する土層断面、S20・S21・S22・S23・S24グリッドの北壁である。S20～S21グリッドは緩やかに東側に向かって傾斜し、S21グリッドの東側で埋没谷の範囲に入ると急激に、V層より下位の層を削って傾斜している。谷の中央部では、埋土をf層まで掘り下げ、一部、h層まで下げているが底面には達していない。S

23グリッド途中で谷部から台地部となる。S24グリッドの堆積は、西側に向かって緩く傾斜するがほぼ水平堆積となっている。谷の埋土はIII層が覆っており、谷の中央部は緩く垂れるように下がっている。

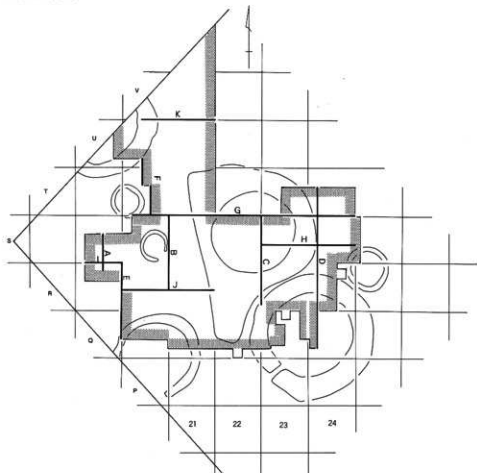
Hライン(第8図)：調査区の東側、S23・S24グリッドの東西方向の土層断面である。S23グリッドは谷部へ入る部分で、X層上面まで削られている。

Iライン(第8図)：調査区の西側、Aラインと直角に交差している。R19グリッドの北壁である。土層の堆積状況は、ほぼ平坦である。

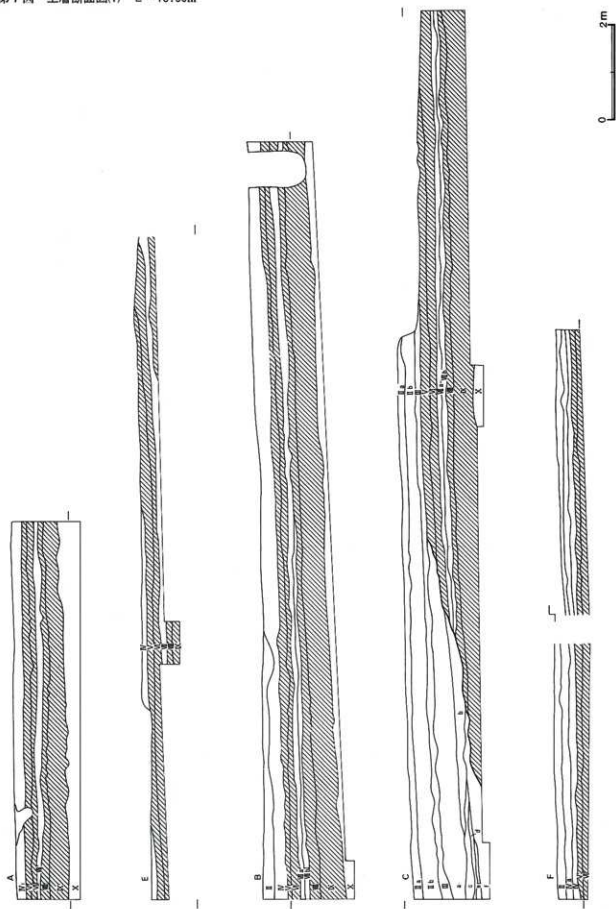
Jライン(第8図)：調査区の南側、R20・R21グリッドの土層断面である。堆積状況は、西から東に緩く傾斜している。

Kライン(第9図)：調査区の北側、U20・U21グリッドの土層断面である。西から東に谷に向かって傾斜している。

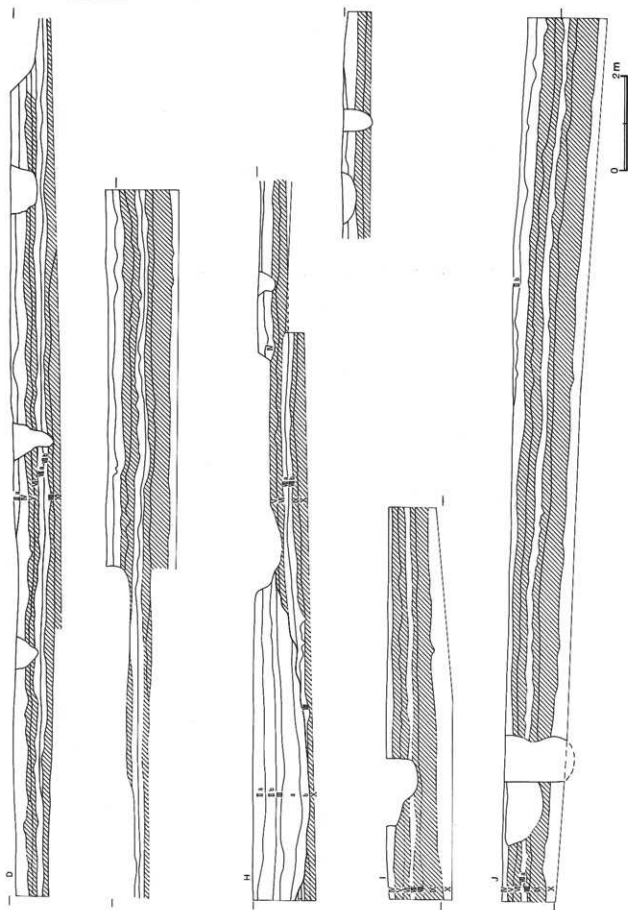
第6図 土層断面配置図



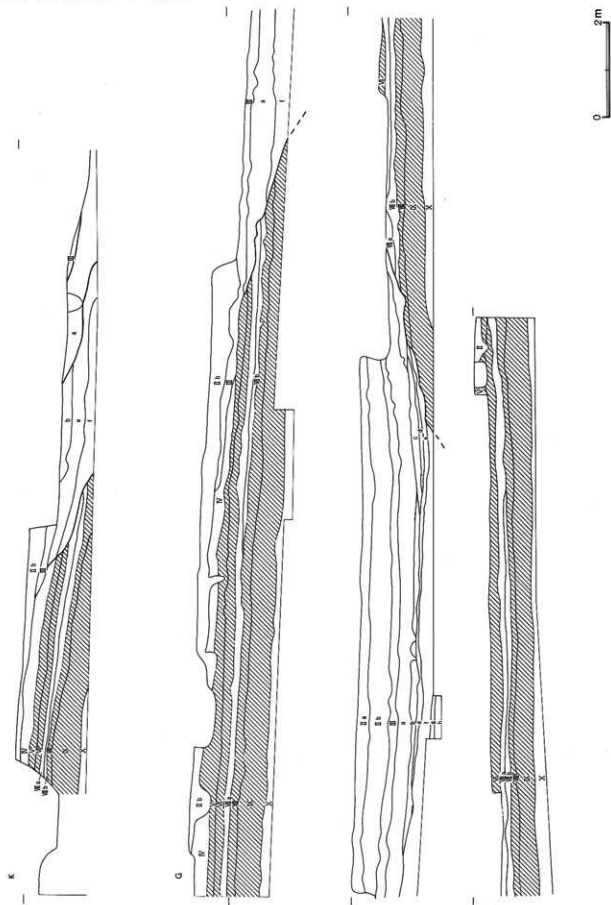
第7图 土层断面图(1) L=15.00m



第 8 图 土层断面图(2) L = 15.00m



第9区 土層断面図(3) L = 15.00m



3. 石器集中

新屋敷遺跡C区からは、石器集中6箇所が検出された。石器集中は何れも、調査区内にある埋没谷の谷頭を囲うように幾つかのグループを形成し分布している。

各グループを概観すると、調査区の北側で石器集中1～3の3つが近接しており、これをグループa。調査区の西側に石器集中4・5が位置し、この2つの石器集中をグループb。調査区東側の石器集中6は単独であるが、一応これをグループcと分けた。また、それぞれのグループは、礫群の分布と重複している。石器集中1（第10図）

本石器集中は、グループaに属す。

先土器時代調査区の北側限界に近い、V21-12・V21-7・V21-13・V21-8グリッドを中心に、V21-11・V21-1・V21-16グリッドの境に股がするように位置し、西側に石器集中2、南側に石器集中3が近接している。各石器集中の間に、古墳の周溝があるため、この石器集中の区分が、果たして有意なまとまりと言えるのか不安もあるが、密集部が幾つかに区切れることから、大筋で問題がないと考えている。また、礫群1の分布と重複している。

遺物の分布は、径約3mの円形の密集部分があり、その周辺にナイフ形石器、掻・削器、石核、敲石が分布している。磨石は周辺から密集部にかけて多数分布するが、細かく砕けた欠損品が多く接合して89（第32図）となる。本遺跡から検出された石器集中で、最も密集度の高い分布である。

次に、各石器の出土状況を見ると、密集部の北側に掻・削器（V21-1275）と石核（V21-1510）が並んで出土し、西側からナイフ形石器（V21-106）と掻・削器（V21-44）が出土し、分布からやや離れて敲石（V21-158）が検出されている。東側には、剥片類と離れて石核（V21-322）が単独で出土している。

遺物の垂直分布は、西から東に谷に向かって緩く傾いている。密集部はレンズ状に膨らみ、垂れ下がっているように見える。掻・削器や磨石等は比較的上の方から、一方、石核（1510）は底面から出土している。

遺物の総数は201点と、最大規模である。器種の内訳は、ナイフ形石器1点、掻・削器3点、石核4点、剥片40点、砕片139点、敲石1点、磨石13点と器種は充実しているが、総点数に占める製品の割合は9%と低く、主体は砕片である。

石器石材の内訳は、黒曜石が172点と全体の86%を占め、続く安山岩が15点7%、黒色頁岩が13点6%、砂岩1点である。器種と石材の関係を見ると、剥片石器類はほぼ黒曜石製で占められ、磨石が安山岩、敲石に砂岩が用いられ、特定器種と石材の関係が強いことが窺える。

石器集中2（第11図）

本石器集中は、グループaに属す。

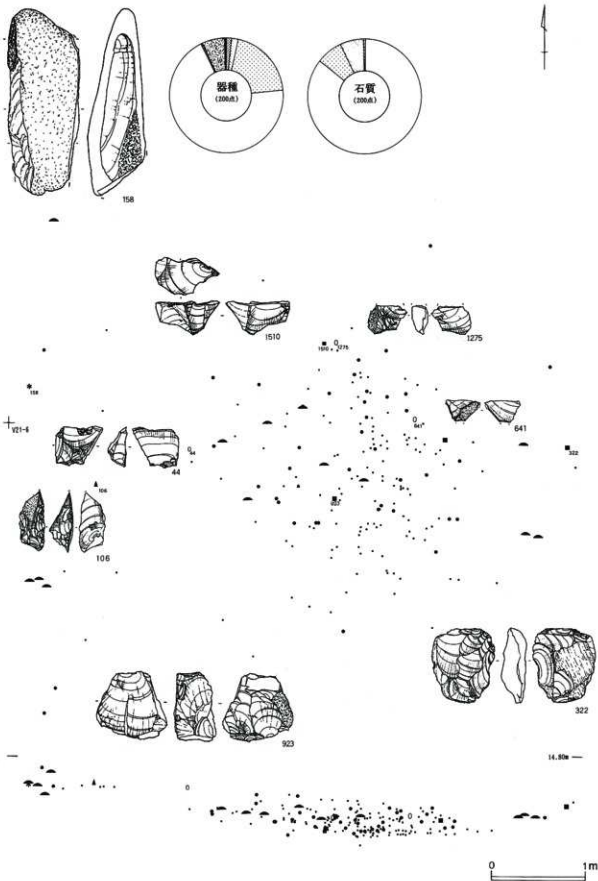
V20-9グリッドを中心に、V20-4・V20-8・V20-5・V20-14グリッドに位置し、東側に石器集中1、南側に石器集中3が近接し、両石器集中との間は古墳の周溝によって壊されている。礫群2の分布とほぼ重複している。

遺物の分布は、南北約4m、東西約4mの不整形で散漫に拡がり、中心を持たない。各石器の分布を見ると、ナイフ形石器（V20-83）が分布の西側に、掻・削器は分布域東側の北・中間・南からそれぞれ1点の計3点が検出されている。磨石が中央部から2点近接して検出されているが、接合して94（第32図）となる。また、掻・削器（V20-12）の西側に近接して、砕片が径0.2mの小範囲に密集する部分がある。

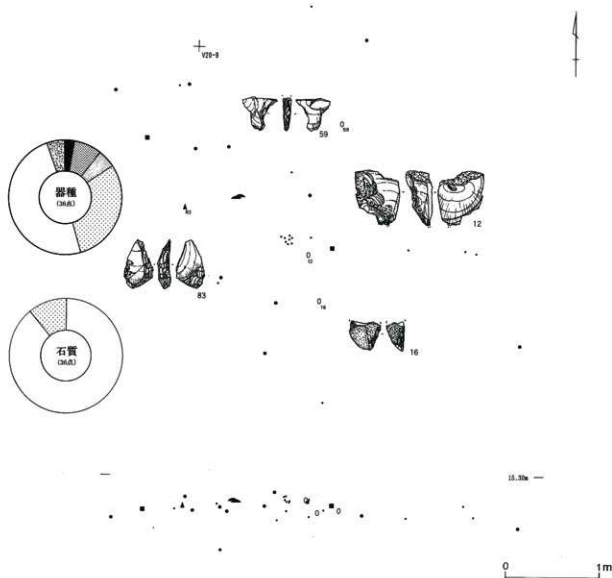
石器の垂直分布は、ほぼ均一である。石器集中1・3と比べて谷から少し離れ、平坦部分に形成された為

器種	石質	器種
■ ナイフ型石器	□ 黒曜石	▲ ナイフ型石器
▲ 角錐状石器	□ 安山岩	▲ 角錐状石器
■ 掻・削器	■ 黒色安山岩	○ 掻・削器
■ 石核	■ 黒色頁岩	■ 石核
● 剥片	■ 黒色頁岩	● 剥片
□ 砕片	■ 頁岩	● 砕片
■ 敲石	■ 頁岩	● 敲石
■ 磨石	■ 硬質頁岩	▲ 磨石
	■ チェート	
	■ 砂岩	
	■ マントフェリス	

第10図 石器集中 I



第11図 石器集中2



であると思われる。

遺物の総数は36点と少ない。器種の内訳は、ナイフ形石器1点、挿・削器3点、石核2点、剥片10点、碎片18点、磨石2点(接合して1点)で、点数の割に挿・削器が多いが、ほとんどが破損品である。

石器石材は、黒曜石が32点で全体の89%を占め、後は安山岩4点だけである。剥片類は黒曜石、磨石に安山岩が用いられているのは、石器集中1と同じ状況である。

石器集中3 (第12図)

本石器集中は、グループaに属す。

V21-16・V21-11グリッドを中心に、V20-25・V20-20・V21-21・V21-12グリッドに股がって、遺物が広がっている。北東側に石器集中1、北西側に石器集中2が位置し、合わせて三角形状に並ぶ。石器集中2との関係は、古墳の周溝によって間か壊されているために不明である。礫群3の分布とほぼ重複している。

遺物は、南北約4m、東西約4.5mの範囲に分布し、径約2mの不整形形状に僅かに纏まる傾向が見られるが、全体に散漫な分布である。

各遺物の出土状況は、分布の中央からナイフ形石器(V21-39)が出土し、北側周辺から石核(V21-307)が、

第12図 石器集中3



そして北西に少し離れてナイフ形石器 (V20-60) が検出されている。中心部には破片の纏まりが幾つか見られ、ナイフ形石器、掻・削器、石核、剥片等が点々と分布している。

遺物の垂直分布は、全体に東側から西側に緩やかに、谷に向かって傾斜している。各遺物を見ると、破片が低い部分から検出されており、ナイフ形石器、石核等は上面から出土している。これは、石器集中1・2と同じ傾向を示している。

石器の総数は50点である。器種組成の内訳は、ナイフ形石器2点、掻・削器1点、石核2点、剥片8点、破片37点で、破片が全体の74%を占めている。

石器石材は、黒曜石が48点で全体の96%を占め、残

りは珪岩と頁岩がそれぞれ1点である。

石器集中4 (第13図)

本石器集中は、グループbに属す。石器集中5の北西側、谷頭の西側に位置している。

Q21-15・Q21-20グリッドを中心に、Q21-13・Q21-14・Q21-18・Q21-19グリッドに位置する。遺物の分布は、南北約3.5m、東西約5.5mの範囲に散漫に拡がっている。

各石器の出土状況を見ると、ナイフ形石器が集中の外周に点在し、掻・削器 (Q21-18) と敲石 (Q21-19) が中央部から出土している。また、掻・削器 (Q21-18) は硬質頁岩と尖頭器と同じ石材が用いられ、尚且つ、尖頭器 (Q21-2) が本集中に近接する石器集中5の分

第13図 石器集中4



布範囲から(第67図)出土しているなど、尖頭器石器群に伴う可能性も高い。しかし、出土レベルでは区分することができないため、ここに掲載しておいた。

遺物の垂直分布は、僅かに西側から東側上がる傾向が見られるが、ほとんど平坦である。また、碎片と製品で出土レベルの差は見られない。

石器の総数は43点と少ない。器種組成の内訳は、ナイフ形石器3点、掻・削器1点、剥片5点、碎片33点、敲石1点で、碎片が全体の77%を占めている。

石器石材は、黒曜石が40点で全体の93%を占め、残りはチャート、珪質頁岩、頁岩がそれぞれ1点である。

石器集中5 (第14図)

本石器集中は、グループbに属す。石器集中4の南東、谷頭の南西部に位置している。

R20・R21の大グリッドの境に、R20-3・R20-4・R20-5・R20-8・R20-9・R20-10・R20-13・R20-14・R20-15・R20-18・R20-19・R20-20・R21-1・R21-2・R21-3・R21-4・R21-6・R21-7・R21-8・R21-9・R21-11・R21-12・R21-16・R21-17・R21-19グリッドと、非常に広範囲に拡がる石器集中である。本石器集中は磯群5と磯群6の分布域がほぼ重複している。

遺物の分布は、南北約8m、東西約12mの広範囲に散漫に拡がるため、分布の形状は何とも述べようがな

い。このような分布を、一つの石器集中として捉えるべきか疑問もあるが、集中を区分する密集部は見られず、周辺で遺物の検出状況に差があるため、一応、一つの石器集中としておく。

各石器の出土状況は、角錐状石器(R20-126)と(R20-213)の2点が、約1mの距離で検出された。

ナイフ形石器は7点出土しているが、それぞれの分布はばらばらで、集中の外周に点在している。(R20-235)・(Q21-1)・(Q21-36)・(Q21-3)の4点は分布の南側縁に約1.5mの間隔で西から東に並んでいる。(R21-90)は分布の中心部で播・削器(R21-86)、石核(R21-132)と近接している。(R20-149)と(R21-162)は、分布の北側の辺に約5mの距離で並んでいる。また、(R20-149)は角錐状石器(R20-213)と近接している。

播・削器は5点出土している。出土状況は、さもナイフ形石器に挟まれているかのように、西から東に(R20-83)・(R20-68)・(R21-117)・(R21-86)・(R21-58)と帯状に並んでいる。

石核は、(R20-6)が南西側の端に、(R21-132)は中心部からそれぞれ検出されている。

剥片、砕片等の分布状況は散漫で、密集部及び一定の傾向は見られない。

遺物の垂直分布は、西側から東側に谷に向かって傾斜しているが、分布範囲が広いので、図面上はほとんど水平に見える。

石器は総数188点と、石器集中1に次ぐ点数で、器種の内訳は、ナイフ形石器7点、角錐状石器2点、播・削器5点、石核3点、剥片25点、砕片146点と充実しているが、敲石、磨石等は検出されていない。

角錐状石器は、遺跡全体で3点しか出土しておらず、その内2点が検出された。また、残りの1点がR-24グ

リッド出土であることから、原位置での出土は、全て本石器集中からになる。

石器石材は、黒曜石が182点で全体の97%を占め、後はチャート、ガラス質黒色安山岩、珪岩、頁岩が小數見られる。

石器集中6 (第15図)

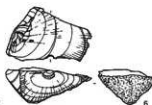
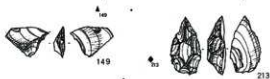
本石器集中は、調査区の東側、谷頭に最も近い所に位置する。石器集中としては単独であるが、グループcと呼称しておく。礫群9と分布が重複し、北側に礫群10、南側に礫群8が近接している。

S23-9・S23-10・S23-4・S23-5・R23-25・R23-19・R23-20・R24-21グリッドに位置する。石器の点数は少なく、小規模な石器集中である。遺物の分布は南北約6m、東西約5mの不整形の範囲に散漫に拡がっている。各石器の出土状況を見ると、ナイフ形石器は北西側から南東側に(S23-372)・(S23-582)・(R23-1)の順で集中域を斜めに横断するように検出されている。石核は北西側に(S23-548)、北東側に(S23-18)が分布し、(S23-18)の周辺から剥片、砕片が何点か纏まっている。磨石は集中の北側に纏まり接合する。

遺物の垂直分布は、東側から西側にかなり傾斜している。各器種による偏在は見られない。

遺物の総数51点と少ない。器種組成の内訳は、ナイフ形石器3点、播・削器1点、石核3点、剥片10点、砕片26点、磨石が8点と、ナイフ形石器と磨石の占める割合が高い。

石器石材は、黒曜石が39点で全体の76%を占め、次いで安山岩8点16%、ホルンフェルス、ガラス質黒色安山岩、チャートである。磨石が多いため、相対的に黒曜石の比率が下がっている。

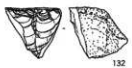


+ 821-1

14.00m

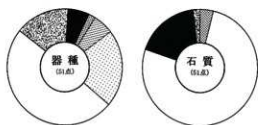
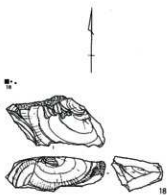
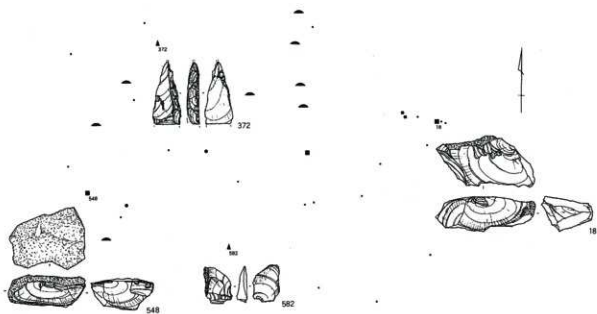


0.17



14.00m

第15図 石器集中6



372



15.00m

0 1m

4. 出土石器

検出された石器は、グリッド等出土のものも含めて、総数654である。その器種の内訳は、ナイフ形石器29点、角錐状石器3点、搔・削器20点、剥片120点、砕片423点、石核19点、敲石2点、磨石35点である。

ナイフ形石器 (第16・17図)

ナイフ形石器は、該期の特徴とも言える多様な形態をしている。また、ナイフ形石器、切出形石器、台形石器等呼称の問題、器種区分の問題はあるが、ここではその点に触れず、個別の石器について観察する。

1 (R20-235) : 先端は正面→裏面方向の力によって、若干欠損している。先端左側縁の欠損は、力の方向は不明であるが、欠損のラインに沿って基部にひびが入っている。裏面基部左側縁に新しい欠損があり、左側縁が一部缺れている。

外形は、左右がほぼ対称形に近く、最大幅が基端付近となる、縦長の三角形である。先端角は34°、側刃角は161°で、刃部は右刃となる。

素材は、基端に原石面の打面を残す縦長剥片である。また、原石の形状は、基端から右側縁に大きく残す原石面から、角礫に近いものと思われる。

正面の剥離面は、主要剥離面よりやや右に傾く方向からの剥離が見られ、打面を移動しながら剥離作業をおこなっていたことが窺える。また、先端上半部の剥離面は、素材作出後の面で、刃縁の再生を意図した剥離の可能性もある。基端の細かい剥離は素材剥片の作出に関連するものか、調整加工であるかは不明である。

調整加工は、右側縁のみに施されている。剥離角度が浅く、あまり規格的とはいえず、粗い感じを受けるが、後に微細な剥離によって側縁を整えている。また、基部下半に、他の調整加工を切るような剥離面が見られ、再調整をしている可能性もある。

2 (SK-49) : 先端を裏面→正面方向に若干欠損している。外形は左右が非対称で、刃縁と側刃縁がほぼ直線的で、背縁はく字に折れている。歪んではいるが三角形状をしている。先端角は30°、側刃角は156°で、刃部は右刃である。

素材は、基端に打面をもつ縦長剥片であるが、打面は欠損している。正面の背縁側下半部に原石面を残し、右側に基端方向からの剥離面が見られる。横断面は厚手で、背縁と正面の交差する点を、頂点とする三角形をしている。正面の剥離面と主要剥離面がほぼ同一方向であることから、連続して縦長剥片を作出していることが窺える。

背縁は上半部に調整加工が施され、下半部は原石面をそのまま残している。調整加工は、粗い剥離で作り出した後、微細な剥離で側縁整形をしている。また、先端の約5mmの部分で、背縁のラインを切るように先端に向かって屈曲している。剥離の切り合いを見ても前後関係は明確で、先端の再生等を含めて、背縁の調整加工が2段階あることが窺える。

側刃縁の調整は平坦剥離に近い裏面加工である。背縁上半部と側刃縁は対峙する辺で、それぞれ異なる調整加工が施されている。

3 (SS43) : 先端を若干欠損する。刃縁裏面全体に使用痕と思われる平坦剥離が見られる。

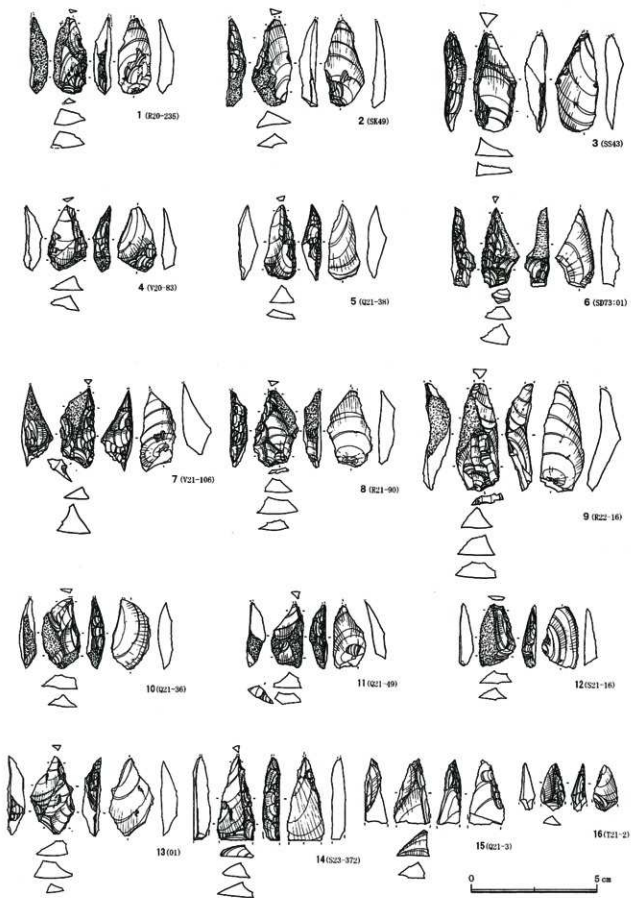
外形は、背縁と側刃縁が直線的で平行し、いわゆる切出状をしている。基端の形状は幅広く「コ字状」をしている。先端角は39°、側刃角は142°で、刃部は右刃である。

素材は上位の縦長剥片を用いており、打面及びバルブの膨らみを背縁の調整加工で除去している。正面は上位からの剥離面と、下位からの剥離面が、やや上半部側で交差し、稜線が器軸に斜め方向に入っている。縦断面は、稜線を頂点とする三角形状になっている。横断面は先端付近が厚手の三角形、基部は変形の台形状をしている。

背縁の調整加工は基端から先端まで、裏面→正面方向の粗い剥離が施され、先端付近は正面→裏面方向の対向剥離が見られる。裏面側、先端付近正面側とも、後に微細な剥離によって側縁を整形している。また、正面の基端部付近に、調整剥離面を打面とする平坦剥離が見られる。

側刃縁はやや浅い角度の剥離と、微細な剥離が施さ

第16图 石器实测图(1)



れている。基端は、左側の一部に正面方向からの小さな剥離面があるが、素材剥片の末端は未調整である。

4 (V20-83) : 外形は刃縁が緩く外湾し、背縁が先端から2/3ぐらいのところでの字に折れる、三角形状をしている。先端角は48°、側刃角は157°で、刃部は左刃である。横断面は厚手の三角形状になる。

素材は背縁の下半部に原石面を残す、横広の剥片を右位に用いており、打面及びバルブの膨らみを、調整剥離によって除去している。正面を構成する剥離面と、主要剥離面の剥離方向が約90°異なっていることから、打点を移動しながら適時、剥片剥離作業が行われていたことが窺える。

背縁の調整加工は、粗い剥離で作り出した後に、微細な剥離で鋸歯状になっている側縁を、滑らかなラインに整形している。側刃縁の加工は、裏面加工と正面に不規則な平坦剥離が小規模施されており、2と同様に、背縁上半部の粗い調整剥離と側刃縁の裏面加工が対峙している。

5 (Q21-38) : 外形は最大幅が基端に近く、刃縁と背縁が直線的な、三角形状である。側面から先端を見ると、アヒルの嘴のように反っており、縦断面は、基部中央に最大厚があり三角形に近い。先端角は28°と鋭角で、刃部は左刃である。横断面の先端付近は厚手の三角形、基部は台形となっている。

素材は、打点が右に少しずれる縦長剥片を用いており、打面及びバルブは背縁の調整加工によって除去されている。正面の剥離面は、主要剥離面とほぼ同じ方向からの剥離である。

背縁の調整加工は、粗い剥離の後、微細な剥離によって、側縁を直線的に整形している。下半部からは細かい剥離によって整形され、基端まで連続し、丸い形状に作り出している。

6 (SD73 : 01) : 外形は先端が鋭利に尖り、側刃縁が内側に折れ、基端が「コ字状」となる。いわゆる切出状をしている。横断面は三角形状をしている。先端角は39°、側刃角は128°である。刃部に原石面を残す右刃である。

素材は右下位からの幅広剥片で、打面を側刃縁の加工で除去している。剥片の末端は、湾曲が強く基端付近の一部は、表面に捲れるようになっている部分がある。打面側の面に、原石面を残しており、67 (V21-8) のような剥片が想定できる。正面の一次剥離面の剥離方向は、全体に調整加工が進んでおり、分かりにくいのが、主要剥離面と逆方向からの可能性が高い。刃部と側刃縁が交わる部分が最も厚くなっており、縦断面を見ると瘤のように見える。

背縁の調整加工は、先端付近に規格的な剥離を施し、その下位は浅い角度の剥離を繰返して施したようで、面的加工に近い感じを受ける。また、後に微細な剥離によって側縁を整形している。

側刃縁の加工は、打面を除去するために、大きな剥離を1回施し、刃縁のラインを振り、後に Blunting 状の剥離と微細な剥離によって側縁を整形している。

基端は、正面からの剥離によって面を作り、膨らみを取り除こうとしたのか、基端面から上に向かって種々の剥離を複数回施している。

7 (V21-106) : 外形は、背縁と側刃縁が平行し、刃部で屈曲し先端で背縁と交わる。基端は刃縁と逆方向に器軸に対して傾斜し、背縁を底面とすると台形になる。縦断面は、基端近くに最大厚がある三角形で、横断面は厚手での正三角形に近い。先端角は70°、側刃角は121°である。刃部に原石面を残す左刃である。

素材は基端に大きく打面を残す縦長剥片を用いており、剥離角は131°である。剥片剥離軸は、石器の基本軸から右に14°ずれている。

背縁の調整加工は、鋸歯状の粗い剥離によって、素材剥片を斜めに切断するように加工した後、微細な剥離によって側縁を整形している。

側刃縁は、1回の剥離によって打面を振り取るように加工し、Blunting と微細な剥離によって整形している。

基端は、打面からの剥離によって、器厚を薄くしようとする意図が感じられる。

8 (R21-90) : 先端を正面→裏面方向の力によって

若干欠損する。外形は背縁と側刃縁が平行するいわゆる切出状をしている。先端角は48°、側刃角は130°である。刃部に原石面を残しており、右刃である。基端は背縁側が僅かに窄まるが、幅で「コ字状」になる。横断面は先端から基部まで台形状をしている。

素材は、基端に単剥離面の打面を残す縦長裂片を用いており、剥離角133°である。正面の中央に見られる面は、主要剥離面と同一の打面から剥離されたもので、基端周辺の細かい剥離は、素材剥片作出の際によるものか、調整加工かは不明である。

背縁の調整加工は、基端から先端まで鋸歯状の剥離が施され、微細な剥離によって一層、鋸歯が強調されている。

側刃縁は、打面からの器軸方向の剥離によって作られ、微細な剥離が一部見られる。

上記、6~8は刃部の正面が原石面である点が共通している。

9 (R22-16) : 先端を裏面からの力によって欠損している。外形は不整形で尖頭状である。先端左側縁にBlunting 状の加工が見られるので、ナイフ形石器と分類しておく。刃部は右刃である。横断面は先端付近が三角形、基部が台形となっている。

素材は、基端に打面を残す縦長裂片で、剥離角は139°である。正面の状況は、上半部の左側面に原石面を残し、右側面は上位からの剥離面の端部によって刃部を形成している。先端付近の後縁上に一部細かい剥離が見られる。下半部に素材剥片と同一打面からの極状の剥離が見られるが、素材作出以前のもので、調整加工ではないと思われる。稜付き石刃を素材としていることが窺える。

10 (Q21-36) : 先端を僅かに欠損している。外形は、背縁が直線的で刃部及び側刃縁は素材剥片の末端をあまり変形せず、半円状に外湾している。刃部は幅狭の左刃で、先端角は63°である。横断面は、基部は台形、先端付近は薄手の三角形となっている。

素材は右側からの幅広裂片で、打面は調整加工によって除去されている。正面は、主要剥離面と同一方向

からの剥離面と、その周辺に原石面を残している。原石面の形状から亜角礫状の礫が想定できる。剥片の形状・規模から71~73の1類型とした石核から作出されたものと考えられる。

背縁の調整加工は、規格的な剥離が器厚いっぱいに行われ、後に微細な剥離によって整形されている。側刃縁は原石面をそのまま残り、微細な剥離が部分的に施されている。

11 (Q21-49) : 先端を裏面背縁側からの力によって若干欠損している。外形は、背縁は直線的で、刃部は基部中程でくの字に折れて刃縁となっている。先端角は52°、刃部は左刃である。

基端に打面を残し、形状は「コ字状」になっている。横断面は、先端から基部中程までは三角形、基端近くは台形状である。

素材は、基端に打面を残す縦長裂片が用いられている。正面は、主要剥離面と逆位の剥離面と、その両側に原石面を残している。打面は、右横方向からの単剥離面と、打面調整等は施されていない。剥離角は130°である。また、剥片剥離軸は石器の器軸から右に14°ずれており、背縁の調整加工が、素材剥片を斜めに切断するように施されている。

背縁の調整加工は、基端から先端に向かって剥離の大きさが小→大→中の順で変化し、後に細かい剥離・微細な剥離によって側縁が整えられている。

側刃縁は、原石面をそのままに、一部微細な剥離が見られるが、意図したものでどうかは疑問である。

12 (S21-16) : 先端を裏面方向からの力で若干折損する。外形は「D字状」に近い。刃部は左刃で、正面に原石面を残している。先端角は欠損部を想定すると、40°前後になるとと思われる。

素材は右横位からの幅広裂片で、素材の端部の正面に原石面を残している。打面は背縁の調整加工によって除去されている。正面の剥離面は、主要剥離面とはほぼ同一方向からの剥離である。原石面の状況から角礫状のものか想定できる。横断面は台形を呈している。10と同様に、71~73の1類型とした石核から作出され

たものと考えられる。

背縁の調整加工は粗く、先端付近だけ微細な剥離によって側縁が整形されている。

13(Q1)：外形は菱形に近い平行四辺形である。刃部は左刃で、先端角48°、側刃角129°である。横断面は意外と厚く、台形状である。

素材は、右斜め上位からの縦長剥片を用いており、打面を背縁加工によって、末端を側刃縁によって除去されている。正面の剥離面は、主要剥離面と近い方向からの剥離が3枚並んでおり、連続して縦長剥片を作出していたことが想定できる。剥片剥離軸と器軸を見ると、素材を背縁と側刃縁の調整加工によって、斜めに切断した中間部を使用していることが考えられる。

背縁の調整加工は、鋸歯状の剥離が器厚いばいに施され、先端近くは正面→裏面に細かい剥離が見られ、後に微細な剥離によって側縁が整形されている。正面から見ると鋸歯状であるが、裏面からは直線的になっている。

側刃縁の調整加工は、基端部に折るような剥離が1枚入り、その上位に三角形に規格的な剥離、後に微細な剥離が施されている。

石材は漆黒の黒曜石で、他のナイフ形石器に用いられている透明度の高い黒曜石とは異なっている。

14(S23-372)：下半部を裏面からの、折るような力によって大きく欠損するため、全体の形状は不明である。現状では、細身の三角形を呈しており、刃部は左刃で、先端角は26°である。刃縁は長く、横断面は三角形を呈している。

素材は右斜め上位からの縦長剥片で、打面は背縁の調整加工によって除去されている。

背縁加工は、器厚いばいに規格的な剥離が施され、後に細かい剥離と微細な剥離によって側縁が整形されている。

15(Q21-3)：下半部を大きく欠損しているが、ナイフ形石器と考えられる。背縁の調整加工は、粗い剥離の後に先端近くに細かい剥離が施されている。刃部の裏面に平坦剥離が見られ、先端は欠損している。黒曜

石以外のナイフ形石器は本資料のみである。

16(T21-2)：先端部の破損品である。

17(SD73：02)：外形は両側縁が平行し、基端がコ字状となり、刃縁が幅狭で長方形に近い。刃部は右刃で、先端角は57°、側刃角は118°である。横断面は先端は薄手の三角形で、基部は厚手の台形となる。

素材は、基端に僅かに打面を残す縦長剥片を用いている。正面は基端近くに原石面を残し、下位からであるが、主要剥離面とは異なる方向の剥離面が基部中央に、刃部には逆位方向の剥離面が見られる。本剥片の石核は、両設又は求心状に近いものと考えられる。

背縁の調整加工は、基部から先端まで器厚いばいに、比較的整った剥離が施され、基部は微細な剥離で側縁が整形されている。一方、先端付近は細かな整形が見られる。

側刃縁の調整加工は、背縁と比べ平坦な剥離で、雑な感じを受ける。基端から基部中程までは微細な剥離が施されている。

18(U20-60)：先端から刃縁と基端を僅かに欠損する。外形は背縁が直線的で、刃部から側刃縁が曲線的に外湾する'D字状'をしている。刃部は右刃で、先端角は49°である。横断面は薄手で、最大厚が背縁にあり、刃縁及び側刃縁に向かって薄くなっている。

素材は、左位の横広剥片で打面とバルブの膨らみは、背縁の調整加工によって除去されている。正面は、主要剥離面とはほぼ同一方向からの、剥離面2枚によって構成されている。

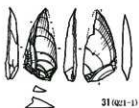
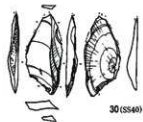
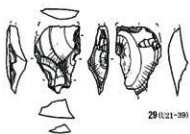
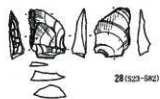
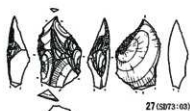
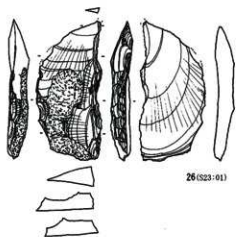
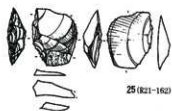
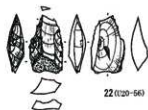
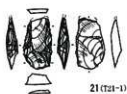
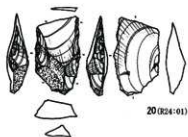
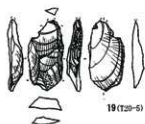
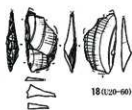
背縁の調整加工は、基端から先端まで規格的な剥離が施され、後に微細な剥離が基部下半部で、不純物と残っているバルブの膨らみを抉り取るかのように施されている。

側刃縁の調整加工は、正面の稜線を整形するかのようになり、その部分に施され、微細な剥離によって側縁を整形している。剥離は背縁に比べて平坦である。

19(T20-5)：先端を裏面方向からの力によって、若干欠損し、刃縁は刃毀れ状に潰れている。

外形は両側縁が平行し、刃部と基端に丸みがある、

第17图 石器实测图(2)



草鞋に近い形をしている。刃部は左刃で先端角は59°、側刃角133°である。横断面は台形をしている。

素材は右上位からの幅広剥片と考えられ、裏面左縁辺に剥片末端のアーチ状の部分が観察できる。打面は背縁の調整加工によって除去されている。正面は、主要剥離面と大凡90°異なる、上位からの3つの剥離面によって構成されている。

背縁の調整加工は、基部から先端に器厚いっぱい大きな剥離を行い、正面で器軸に斜めに入り後縁が、背縁と交差地点に集中的に小形の剥離が施されている。後に、微細な剥離を先端近くまで施し、側縁の鋸歯状な部分を整形している。しかし、先端部は細かい調整が見られず、側縁のラインが歪れた印象を受ける。端部の再生等と関連するのかもしれない。

側刃縁の加工は、基端左側縁の深い剥離1枚と、後は微細な剥離が基端周辺に施されているのみである。

20(R24:01)：外形は両側縁が平行する台形状に近い。刃部は器軸に対しほぼ直角の79°で、基端はやや丸みが見られる。横断面は台形である。

素材は左位からの横広剥片と思われる。打面は側刃縁の調整加工、剥片末端は背縁の調整加工によって除去されている。しかし、打面側はリングの状況やバルバー・スカーの端部、右基端近くにアーチ状の反りが見られることから、素材剥片を大きく変形させていないことが窺える。正面は基端近くに原石面を残し、上半部に主要剥離面と約90°異なる上位からの剥離面が見られる。

背縁の調整加工は、4～5回の大きな剥離が器厚いっぱい施され、鋸歯状になる部分を小形の剥離で調整し、後に微細な剥離が基部中程から先端にかけて、集中的に側縁を整形している。

側刃縁の調整加工は、2回の大きな比較的平坦な剥離が施され、後に小形の剥離・微細な剥離によって側縁が整形されている。

21(T21-1)：刃縁は新しい損傷によって失っている。基端縁は裏面からの折るような力によって若干欠損している。

外形は両側縁が平行する縦長の台形状をしている。

刃部は現況から右刃になると考えられる。横断面は台形で、基部の中程では厚くなるが、全体に薄手である。

素材は、左位からの小形横広剥片と考えられる。打面は、側刃縁の調整加工によって除去されているが、バルバー・スカーやリングを見る限り、大きく変形していないと思われる。剥片末端は、背縁の調整加工によって切断するように整形しており、素材剥片の打面部側約半部が2/3程度を利用していることが窺え、該期の特徴的な素材作出の一つである。

正面は、2枚の剥離面で構成されている。それぞれ、主要剥離面と同一方向であるが、打面の位置は異なるように、求心的な石核が想定できそうである。

背縁の調整加工は、基端から先端まで比較的平坦な剥離が施され、後に微細な剥離によって整形される。側刃縁は、調整加工の中程に、打面を抉り取るように器厚いっぱい急角度の剥離を1回施し、その両側を小形の剥離によって整えている。また、微細な剥離は抉るような剥離面を中心に施されている。

22(U20-56)：外形は両側縁が先端に向かって、僅かに窄まる台形状をしている。刃部は右刃で、先端角は89°と器軸に対しほぼ直角に交差する。横断面は、厚手で、右側縁が打面と正面剥離面が鋭角に交わり、平行四辺形となっている。

素材は、右位の横広剥片が用いられている。側刃縁(右側面)に打面を大きく残し、調整加工の代わりにしている。背縁(左側縁)は素材剥片の末端を切断するように調整加工が施されており、21同様に打面部側の約半部が2/3程度を利用していることが窺える。

正面の下半部に原石面を残している。剥離面は、主要剥離面とほぼ90°異なる方向からの剥離で、打面の剥離方向と一致する。打面と正面の剥離面の切り合い関係は、打面→右側の剥離面→中央の刃部を形成している剥離面の順で新しくなることから、石核の角(強い稜をもつ石核か?)の部分での剥片剥離と思われる。また、本剥片は、石核を横に置き換え、作業面を打面に作出されたものと思われる。

背縁の調整加工は、基端から先端まで器厚に合わせて、厚さいっばいの剥離が4~5回程度施され、側縁は鋸歯状になっている。後に施された微細な剥離は、基部下半部の鋸歯状部分を整形しているが、先端部側は逆に、鋸歯の弧を大きく変形し、その部分を強調しているように見える。

側刃縁は、打面の平坦面を調整加工又は折断面のかわりとしており、打点に割れ円錐が観察できる。

23(Q21-39)：先端を背縁方向からの力によって若干欠損する。左側縁の欠損部は、表面の風化状況が若干異なり、新しい欠損の可能性もある。

外形は、背縁が直線的で側刃縁が平行する台形状をしている。刃部は左刃で先端角は57°、側刃角は124°である。縦断面は、裏面が平坦で正面が湾曲し、凸レンズ状になっている。また、横断面は、最大厚が背縁にあり、刃縁及び側刃縁に向かって薄くなる三角形状となる。基端左側は、大小2枚の剥離面によって鋸歯状となり、後の微細な剥離によって強調されている。

素材は、右上位からの幅広剥片が用いられている。打面は背縁の調整加工によって除去されているが、剥片の末端は、刃縁及び側刃縁に残しており、それから想定すると、打面部側を全体の2/3程度のところで、調整加工によって切断して形状を作り出したものが、用いられていることが窺える。正面の剥離面は、主要剥離面と90°異なる上位からで、刃縁を形成している。

背縁の加工は、基端に素材作出以前の面を1枚残しており、その面から裏面に微細な平坦剥離が見られる。調整加工は、先端まで直線的に比較的整った剥離が器厚いっばいに施され、僅かに鋸歯状になっている。後の、微細な剥離は、裏面側の鋸歯状の部分を決るように取り除き、緩く内湾ように側縁を整えている。

側刃縁の加工は、微細な剥離等が施されていた可能性が高いが、欠損のため詳しくは不明である。

24(R23-1)：刃縁を刃毀れ状に欠損している。外形は基端が尖り、逆錐形をしている。刃部は左刃である。縦断面は凸レンズで、横断面は刃部付近は薄手の台形、基部中程では三角形に近くなる。

素材は、右位の小形幅広剥片を用いている。打面は原石面で、側刃縁(左側面)に残し、調整加工と同じ効果を出している。背縁の調整加工は素材剥片を、約2/3程度に斜めに切断するように施され、石器形状を作り出している。正面は、主要剥離面と90°異なる上位からの剥離面によって湾曲した面が作られており、最も厚い基部中央に僅かに擦痕が見られる。

背縁は基端付近から先端まで調整加工が見られる。下半部の2枚の大きな剥離を切るように、上半部には不規則な剥離が施され、後に微細な剥離によって側縁が整形されている。全体に加工は雑である。

側刃縁は、正面に打面からの平坦剥離が見られる。

25(R21-162)：刃縁は刃毀れ状に僅かに欠損している。外形は、長さか幅があまり変わらず、各縁が直線的で正方形に近い。縦断面は台形状、横断面は刃部が薄手の三角形、基部が長方形、基端付近が凸レンズとなっている。

素材は、右位の幅広剥片が用いられている。打面(左側縁)は調整剥離によって除去されており、右側縁は剥片の末端がちょうつがい状に正面まで捲れている面を、折面と同じ効果で使っている。パルプの膨らみやリングの状況から、素材を大きく変形させたものではなく、打面側を調整加工によって、斜めに切断しただけのものであると思われる。正面は、基端付近に原石面を残し、上位を主要剥離面と同一方向の2枚の剥離面で構成されている。

左側縁の加工は、器厚いっばいの大きな剥離が3枚施され、鋸歯状になる部分を小形の剥離、微細な剥離によって側縁を整形している。また、基部中程は微細な剥離によって、パルプの膨らみを抉り取ろうとしているようである。

26(S23:01)：先端部を正面からの力によって若干欠損し、刃縁は刃毀れ状に欠けている。外形は背縁が直線的で、刃縁及び側刃縁が外湾する、半月形に近い形状である。刃部は左刃で先端角は58°である。横断面の刃部は三角形、基部は長方形になっている。

素材は、右上位からの大形の幅広剥片が用いられて

いる。打面は背緑の調整加工によって除去され、末端は側刃緑の加工によって直線に整形されている。素材剥片の形状は、刃部と基端に側緑を残すだけである。正面は、下半部に原石面を残し、刃部は主要剥離面に近い方向からの剥離面が、基端には90°異なる右方向からの剥離面が見られる。

背緑の調整加工は、基端から先端まで施されている。先端付近と基部中程に、大きい剥離が器厚いっぱい施され、下半部は通常の剥離が施されるようになる。微細な剥離は、基端から基端に集中的に施され、鋸歯状になる部分を抉るようにし、裏面の中央にノッチ状の窪みが見られる。

側刃緑は、2枚の剥離面と微細な剥離が基端付近に部分的に施されている。

27(SD73:03): 基端を正面からの力によって欠損する。外形は、刃緑が直線的で、背緑が僅かに内湾しており、先端が鳥の嘴状になっている。刃部は幅狭の左刃で、先端角は86°、側刃角は145°である。横断面は先端と基端が導手の三角形、基部は台形をしている。

剥片は右側面を打面とする、右位の厚手の横広剥片が用いられている。正面は、主要剥離面と約90°異なる、上位と下位方向からの剥離面で構成され、求心状の石核が想定される。剥片の末端は、1/4程度を切断するように、刃緑の調整加工が施されている。

背緑は、上半部に原石面の打面を残し、加工は側面からの平坦剥離が入念に施されている。下半部は裏面からの剥離が1枚、背緑加工の為か、打面の除去を目的としたものか施されており、後に微細な剥離も見られる。

側刃緑は、下半部に1枚の大きな剥離が施され、剥片の端部を切っている。調整剥離は、その剥離面と刃部の面が交わる稜線の高まりを取り除くかのように、三角形状に集中して施されている。後に微細な剥離は、三角形の部分を中心に、基端近くから刃緑まで僅かであるが行われている。

28(S23-582): 外形は、小刀を思わせるような形状をしている。刃緑は器体が小さいわりに長い。刃部は

右刃で、先端角は88°である。横断面は基部中程は台形、基端付近は凸レンズ状をしている。

素材は、下位の小形幅広剥片が用いられ、打面は正面方向からの力によって除去されている。正面には主要剥離面と90°異なる、右位からの剥離面が見られる。

背緑の調整加工は、基端から先端まで規格的な剥離が施されており、後に微細な剥離によって側緑が整えられている。

29(U21-39): 刃緑を正面からの平坦剥離によって欠いている。外形は刃部が器軸に直交し、基端が窄まる筥の様な形をしている。縦断面は基部中程に最大厚の稜をもつ三角形状をし、横断面は台形に近い。

素材は、右位からの横広剥片で、打面側を調整加工によって整形しているが、リング等を見ると、素材剥片を大きく変形させたものではない。正面の剥離面は、主要剥離面に近い方向からの面と、90°異なる方向からの面がある。

右側緑の加工は、下半部に打面を除去するための大きな剥離が、上半に規格的な剥離が施されている。

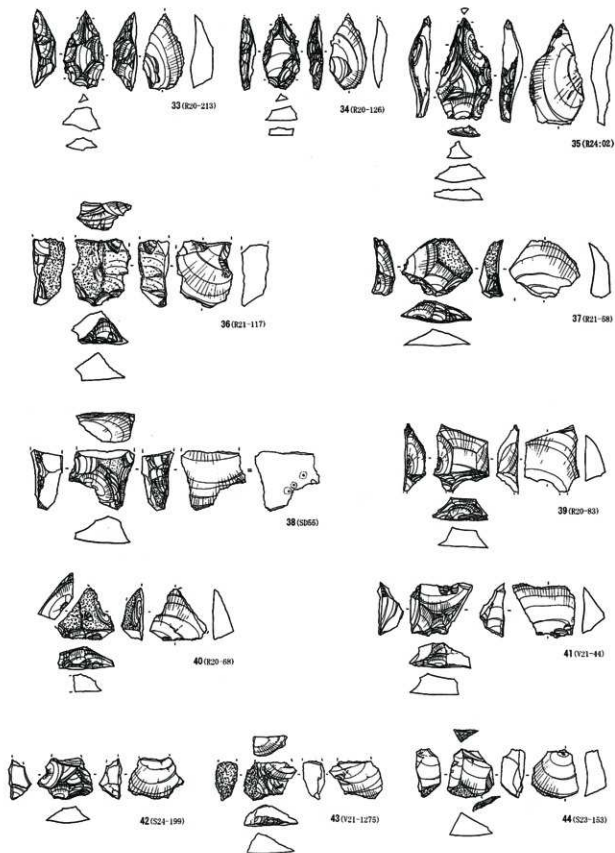
左側緑は、上半部に素材末端が正面まで捲れるようになっている、その下半部に細かい剥離によって整形している。

30(SS40): 先端及び刃緑を若干欠損する。右側面に原石面の打面を残す横広剥片を素材に用いている。刃緑下半部に Blunting 状の調整加工が見られるので、ナイフ形石器として捉えておく。刃部は右刃である。

31(Q21-1): 先端から刃緑を若干欠損している。基端部に最大幅があり、外形は縦長の三角形状をしている。基端に調整加工が見られることからナイフ形石器と分類しておく。刃部は右刃である。

32(R20-149): 外形は逆三角形状となっている。素材剥片は右位の縦長剥片が用いられており、打面のバルブの膨らみは、右側緑の調整加工によって除去されている。左側緑は正面方向からの折衝によって面を構成している。刃部は緩い湾曲をしており、左側に微細な剥離が見られるが、使用によるものかは不明である。

第18图 石器实测图(3)



角錐状石器 (第18図)

33(R20-213) : 左位からの厚手の横広剥片を素材に用いている。外形は左右対称の整った形状をしている。先端角は60°である。横断面は先端が三角形、基部が厚手の台形になっている。正面の剥離面は、主要剥離面と同一方向である。

調整加工は両側縁ともに、急角度の大きい剥離を3~4回施し形を作り出している。また、鋸歯状になる部分に、小形の剥離を三角形に施して調整し、微細な剥離が側縁を整形している。基端は、下位方向からの剥離によって概ね丸く整形されている。

裏面は、バルブの膨らみに波打っており、膨らんだ部分を除去する目的か、平坦剥離が右下位に施される。

34(R20-126) : 先端部を裏面からの力によって、若干欠損している。右位からの横長剥片が用いられている。外形は、左右対象で整った形状をしており、33と大きさは非常に近似しているが、厚さは約半分と薄い。先端角は53°である。横断面は先端は三角形であるが、全体に台形及び長方形をしている。正面は1枚の剥離面で作られ、周辺に調整加工が施されている。剥離の方向は、主要剥離面と約90°異なっている。

調整加工は、打面側(右側縁)下半部に原石面と、左側縁下半部の折断面以外は、規格的剥離が施され、後に微細な剥離によって側縁が綺麗に整えられている。

35(R24 : 01) : 左位の横広剥片が用いられており、裏面はバルブの膨らみを大きく残している。外形は、左右対象形である。最大幅が基端のやや上で、下は窄まっている。基端は正面からの折るような剥離によって、直線的に形作られ、その面からの剥離が正面に見られる。先端角は47°である。正面の剥離面は、主要剥離面の方向と異なり、ランダムであり規則性は見られない。縦断面は主要剥離面の湾曲によって、先端が大きく反って鳥の嘴のようにになっている。横断面は、先端から上半部が三角形、基部から基端にかけて台形状になる。

調整加工は、上半部の両側は大きい剥離によって、先端を大まかに作り出し、端部を細かい剥離によって

整えている。裏面の右側縁に小形の平坦剥離が見られるが、使用によるものか、整形加工によるものかは不明である。基部の加工は、打面側(左側縁)に原石面を細く残し、左側縁は比較的規則的な剥離が施されている。微細な剥離が左側縁の先端付近と、右側縁の基部に施され、側縁を整形している。

34・35と比べると、作りは粗く一回り大形である。

獲・削器 (第18・19図)

36(R21-117) : 上半部を欠損する。正面に原石面を残す縦長剥片を素材としている。刃部は厚手で、長軸の一端に施すいわゆる搔器である。

正面は全面原石面で、中央に器軸に平行する稜線が見られ、角礫が用いられていることが窺える。横断面は厚手で三角形になる。

刃部の作りは粗く、3枚の剥離面が器厚いっぱいには施され、微細な剥離が不規則に刃縁を抉るように入っている。微細な剥離に関しては、使用によるものと思われる。刃部の剥離角は48°、厚さは10mmである。

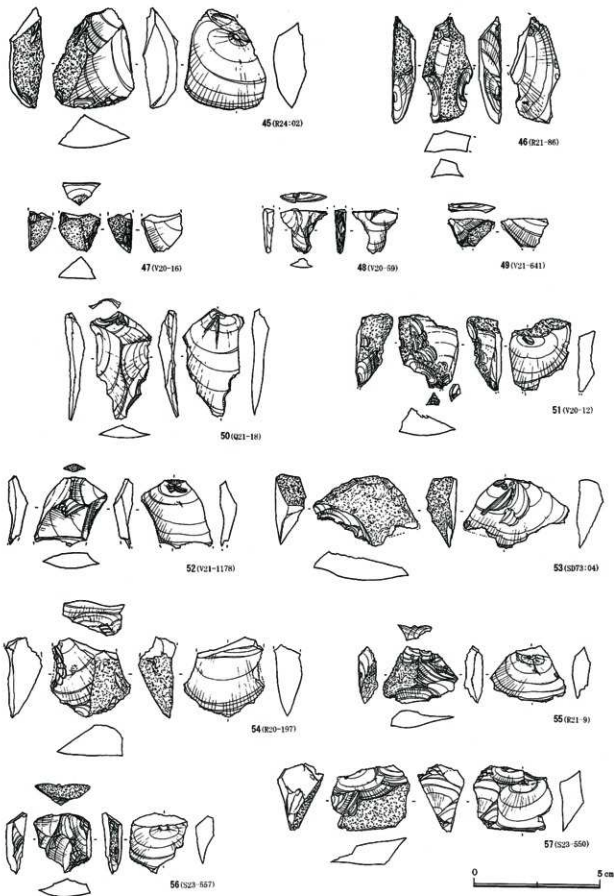
基部には加工が施されておらず、左側縁の欠損面からの種状の剥離面は、欠損時に同時に剥がれたものと考えられる。

37(R21-58) : 外形は円盤状をしており、厚手の刃部が全周の約半分に施され、上端に細かい剥離が見られる。該期に多く見られる円刃搔器である。素材は打面側に刃部を作っているため、素材剥片の復原は難しいが、主要剥離面のリングの感じから、横広の剥片が想定できる。

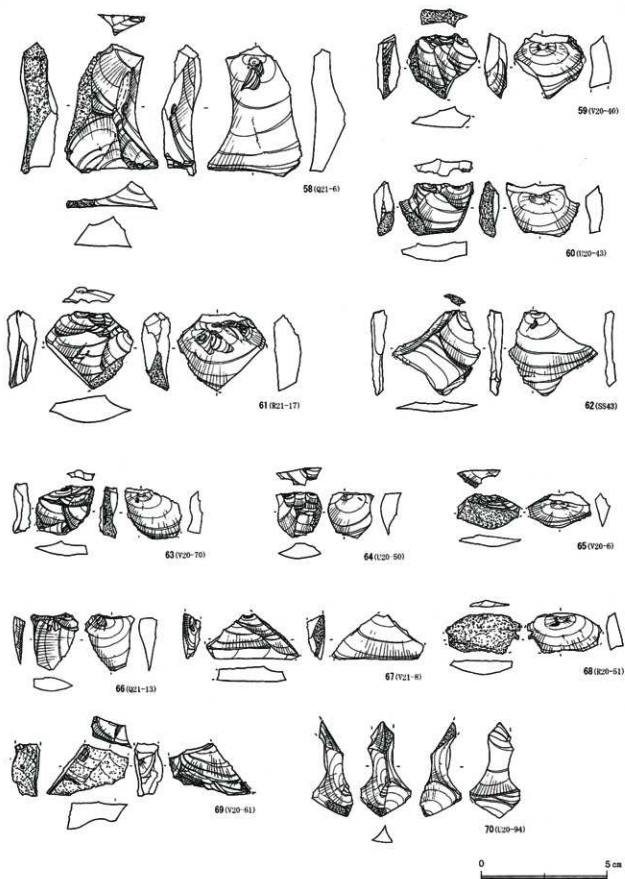
正面は、原石面と2枚の剥離面で構成されている。剥離面は主要剥離面と同じ方向と、約90°方向を異なる剥離である。打点を移動しながら、幅広の剥片を作出していたことが窺える。

刃部は、右側からの連続する剥離を、左端の1枚の剥離面が切っている。欠損による再生の可能性が高いが、微細な剥離もそこで途切れるので、欠損のものとも考えられる。微細な剥離は刃縁を抉るように入っており、使用によるものと思われる。刃部の剥離角は68°、厚さは現状で8mmである。

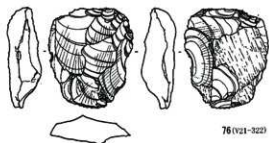
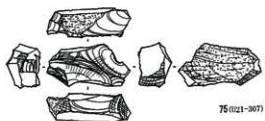
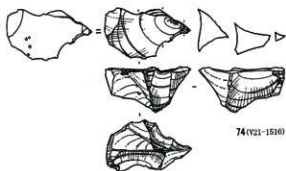
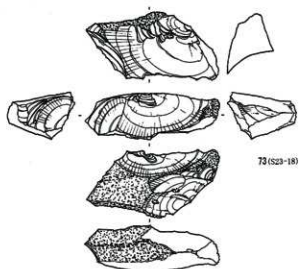
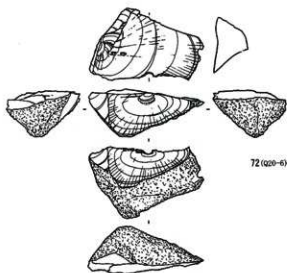
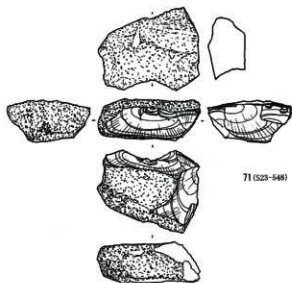
第19图 石器实测图(4)



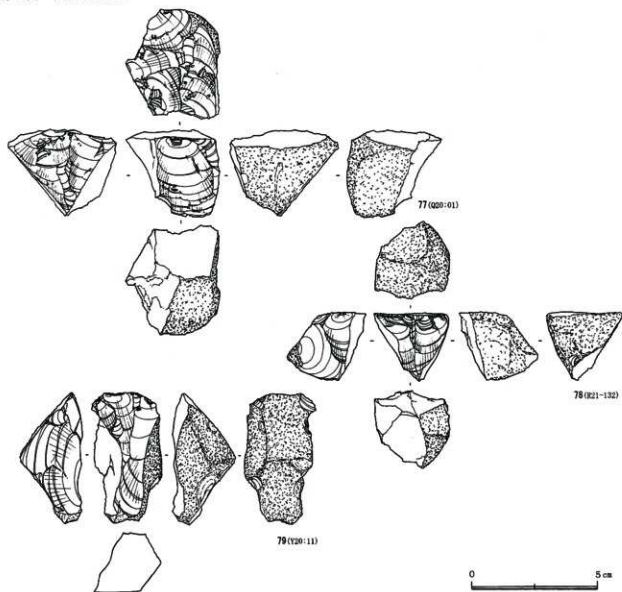
第20图 石器实测图(5)



第21图 石器实测图(6)



第22図 石器実測図(7)



上端の加工は、細かい剥離で、規則性があまりないので、基部整形の可能性もある。

38(SD55)：上半部を欠損する。表面に原石面を残す縦長剥片を用いて、右側縁に厚手の刃部加工を施している。

正面に一次剥離面は無く、原石面の形状から、亜角礫状の素材から初期に剥がされた、厚手の剥片であったことが想定できる。横断面は台形状である。

下端は、裏面からの剥離によってノッチ状に抉れている。裏面に3箇所 of 打撃痕が見られることから、左端部に見られる僅かな突起状の作り出しを意図したも

のと思われる。

右側縁の刃部は、裏面から原石面を剥がすように施され、一部器厚いばいに達するが、不規則な感じを受ける。微細な剥離は使用によるものと思われる。

左側縁は、突起部を作り出すように細かい剥離が施されている。

39(R20-83)：主要剥離面と正面の剥離面が、同じ剥離方向の縦長剥片を素材とし、打面側に刃部加工が施されている。刃縁は僅かに内湾する。加工は右側に集中し、1箇所僅かに尖らした所が見られる。

40(R20-68)：左側上半部を正面方向からの力によ